

河南町文化財調査報告書 第5冊
公益財団法人 大阪府文化財センター調査報告書 第298集

河南町

東山遺跡発掘調査報告書Ⅲ

(仮称)大阪芸術大学キャラクター造形学科新築工事準備工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2020年1月

河 南 町 教 育 委 員 会
公益財団法人 大阪府文化財センター

河南町文化財調査報告書 第5冊
公益財団法人 大阪府文化財センター調査報告書 第298集

河南町

東山遺跡発掘調査報告書Ⅲ

(仮称)大阪芸術大学キャラクター造形学科新築工事準備工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

河 南 町 教 育 委 員 会
公益財団法人 大阪府文化財センター



ガラス罎塼（外面）



ガラス罎塼（内面）



序 文

河南町は、町域のほぼ東半を国定公園に指定される金剛・葛城の山並みが占め、その西側に石川水系によって形作られた平地部が広がっています。町域の4分の3を緑地系が占める土地利用は、古来の豊かな自然の恵みを、先人がいかに育み守ってきたかを物語るものでしょう。

そして私たちの町には、寺社や寺内町、山城から古墳まで多くの文化遺産が受け継がれています。古市古墳群を石川の下流に臨み、渡来色豊かな群集墳を擁する一須賀古墳群、個性際立つ双円墳の金山古墳、王陵にも匹敵する規模の平石古墳群など、バラエティ豊かな古墳は本町の歴史を特徴づけています。

本書は平成最後を彩る平成30～31年度に実施した大阪芸術大学の新棟建築に伴う発掘調査の成果報告書です。開発の少ない町内で4,400㎡にも及ぶ面積を調査した貴重な成果であり、極めて断片的にしか分かっていない当地域の古代の歴史像に新たな知見を加えるものとなりました。

調査の実施にあたりましては、事業者であります学校法人塚本学院をはじめ、大阪芸術大学に所属される先生や学生、職員の方々、施工関係者、調査関係者、近隣住民の皆様にはご理解と多大なご協力を賜りました。また大阪府教育庁ならびに公益財団法人大阪府文化財センターの諸機関にはご指導と格別のご協力をいただき、河南町の文化財保護行政が推進できましたことを深く感謝いたしますとともに、今後ともより一層のご理解とお力添えを賜りますようお願い申し上げます。

令和2年1月

河南町教育委員会

教育長 新田晃之

は し が き

河南町は大阪府東南部の南河内地域に位置し、南は千早赤阪村、北は太子町、西は富田林市、東は葛城山地を隔て奈良県葛城市と接しています。

河南町に所在する東山遺跡は、葛城山地の西側に広がる丘陵上に位置し、すぐ西には梅川が大きく蛇行しながら北流し、石川へと合流しています。昭和43年の大阪府教育委員会の分布調査により発見されました東山遺跡は、その後の大規模な住宅開発や大阪芸術大学の整備、拡張などに伴う発掘調査により、弥生時代後期から中世にかけての複合遺跡として、南に位置する一須賀古墳群と共にその名を知られています。

今回の調査では、奈良時代から鎌倉時代にかけての掘立柱建物群を発見したほか、円面硯と呼ばれる硯や律令祭祀に用いられる土馬、またガラス埴塼などが出土しています。これらの遺構や遺物は、本遺跡を特徴づけるものと考えられ、当地域における東山遺跡の性格を考える上で貴重な資料と言えます。

最後になりましたが、調査にあたっては事業者であります学校法人塚本学院をはじめ、施工者の大成建設株式会社関西支店、多大なるご協力とご指導を賜った大阪府教育庁、河南町教育委員会、ならびに地元関係各位に深く感謝いたしますとともに、今後とも当センターの事業につきまして、より一層のご理解とご支援を賜るよう切にお願いいたします。

令和2年1月

公益財団法人 大阪府文化財センター

理事長 田邊征夫

例 言

1. 本書は、南河内郡河南町東山地内に計画された、(仮称)大阪芸術大学キャラクター造形学科新築工事準備工事に伴う東山遺跡の埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
2. 調査は、株式会社島田組から委託を受けた公益財団法人大阪府文化財センターが、大阪府教育庁文化財保護課の指導の下、河南町教育委員会と共同で実施した。
3. 受託契約名・期間、調査期間・体制については以下のとおりである。

受託契約名 (仮称)大阪芸術大学キャラクター造形学科新築工事準備工事に伴う東山遺跡発掘調査

受託期間 平成30年11月1日から令和2年1月31日

現地調査期間 平成30年11月1日から平成31年4月24日

整理・報告書印本・配布期間

平成31年4月24日から令和2年1月31日

調査体制

【河南町教育委員会】

[平成30年度]

河南町教育委員会事務局 教・育部 教育課

課長補佐兼社会教育係長兼文化財係長 藤木幹史、同課文化財係主事 炭谷有理子

[平成31年度・令和元年度]

河南町教育委員会事務局 教・育部 教育課

課長補佐兼社会教育係長兼文化財係長 藤木幹史、同課文化財係主査 向井 妙

【公益財団法人大阪府文化財センター】

[平成30年度]

事務局次長兼調整課長 岡本茂史、調査課長 三好孝一、調査課主査 佐伯博光

[平成31年度・令和元年度]

事務局次長兼調整課長 岡本茂史、調査課長 岡戸哲紀、調査課長補佐 佐伯博光

4. 本書で用いた写真の内、現場写真は佐伯が、遺物写真は中部調査事務所写真室が撮影を行った。
5. 出土遺物の内、ガラス埴塼については独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所と当センターで協定書を結び連携研究を行い、都城発掘調査部考古第一研究室研究員 田村朋美氏より玉稿を賜った。
6. ガラス埴塼に付着しているガラス成分の産地同定のため、鉛同位体比分析を日鉄テクノロジー株式会社尼崎事業所と委託契約を結び実施した。
7. 本書の作成・編集は佐伯が行った。
8. 本書に係る遺物、写真、実測図などの記録については、河南町教育委員会において保管している。広く利用されることを希望する。

凡 例

1. 遺構挿図は、必要に応じて縮尺を変えており、スケールバーを図中に表記している。
2. 遺構挿図の標高は、東京湾平均海面（T.P.）を基準としている。また、本書中の標高は全て東京湾平均海面からプラス値のため、プラスを除いて表記している。
3. 遺構挿図の座標値は、ITRF 座標系 GRS80 楕円体に準拠する世界測地系（測地成果 2011）による平面直角座標系第Ⅵ系に基づき表記する。単位はmである。
4. 遺構挿図の方位は、座標北を示す。
5. 現地調査および整理作業に際しては、当センターの『遺跡調査基本マニュアル』2010 に準拠した。
6. 本書中の土色および遺物の色調は、小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』2006 年度版農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所（現 一般財団法人日本色彩研究所）色票監修を用いた。
7. 遺構名は、全調査区を通して検出順にアラビア数字による通し番号を付け、番号の後ろに遺構の種類（例：1 土坑・30 溝）を付している。また、前述の遺構の集合体である掘立柱建物などについては、これと区別するために遺構種類の後ろに番号（例：掘立柱建物 1）を付して表記している。
8. 遺物挿図の縮尺は原則、土器を 4 分の 1、石器を 2 分の 1 としているが、必要に応じて縮尺を変えている。なお、図中にスケールバー表記している。写真図版の遺物は、縮尺を統一していない。
9. 掲載遺物は通し番号を与えて表示し、本文・挿図・写真図版ともに一致する。
10. 本書作成にあたって、以下の文献を参考にした。

古代の土器研究会編	1992	『古代の土器 1 都城の土器集成』
古代の土器研究会編	1993	『古代の土器 2 都城の土器集成Ⅱ』
古代の土器研究会編	1994	『古代の土器 3 都城の土器集成Ⅲ』
中世土器研究会編	1995	『概説 中世の土器・陶磁器』（有）真陽社
古代の土器研究会編	1997	『古代の土器研究』第 5 回シンポジウム資料
財団法人 大阪府文化財センター	1998	『河内平野遺跡群の動態』Ⅳ
古代の土器研究会編	2005	『古代の土器研究』第 8 回シンポジウム資料
小森俊寛	2005	『京から出土する土器の編年的研究 —日本律令的土器様式の成立と展開、7 世紀～ 19 世紀』（有）京都編集工房
橋本久和	2018	『概論 瓦器碗研究と中世社会』
橋本久和	2009	『中世考古学と地域・流通』真陽社

目 次

卷 頭 カ ラ ー	
序 文	
は し が き	
例 言	
凡 例	
目 次	

第 1 章 調査に至る経緯と経過.....	1
第 1 節 調査の経緯と経過	1
第 2 節 調査の方法	4
第 2 章 位置と環境	6
第 1 節 地理的環境	6
第 2 節 歴史的環境	7
第 3 章 基本層序	10
第 4 章 検出した遺構と遺物	21
第 5 章 自然科学的分析	82
第 1 節 埴埴付着ガラスの鉛同位体比分析	82
第 2 節 埴埴付着ガラスの分析	84
第 6 章 まとめ	90

写真図版
報告書抄録

挿図目次

図 1	調査地と既往の調査地	2	図 42	掘立柱建物 26	48
図 2	今回の調査地	3	図 43	掘立柱建物 27	49
図 3	地区割り図	5	図 44	掘立柱建物 29	50
図 4	調査区割り図	5	図 45	柱列 3	51
図 5	調査地周辺の地質図	6	図 46	柱列 5	52
図 6	調査地周辺の遺跡	9	図 47	柱列 6	53
図 7	柱状図位置	11	図 48	柱列 7	53
図 8	1 区・4 区・6 区東壁 (①から⑫)	12	図 49	柱列 8	53
図 9	3 区東壁 (⑬から⑰)	14	図 50	柱列 9	54
図 10	3 区南壁 (⑱から㉒)	15	図 51	柱列 5 323 柱穴・482 ピット出土遺物	54
図 11	1 区西壁 (㉓から㉖)	16	図 52	64・65 ピット、518 ピット、428 ピット	54
図 12	3 区西壁 (㉗・㉘)	17・18	図 53	土坑・溝・凹み・谷位置図 (1)	56
図 13	2 区北壁 (㉙から㉚)	19	図 54	土坑・溝・凹み・谷位置図 (2)	57
図 14	5 区西・北・東壁 (㉛から㉞)	20	図 55	21 土坑、42 土坑、60 土坑、92 土坑	58
図 15	調査区等高線図	22	図 56	21 土坑・96 土坑・144 土坑・203 土坑・223 土坑・ 240 土坑 出土遺物	60
図 16	掘立柱建物・柱列 位置図 (1)	23	図 57	96 土坑、98 土坑、142 土坑、144 土坑	61
図 17	掘立柱建物・柱列 位置図 (2)	24	図 58	184 土坑、203 土坑、223 土坑	62
図 18	掘立柱建物 1	25	図 59	240 土坑	63
図 19	掘立柱建物 2	25	図 60	259 土坑、300 土坑、344 土坑、351 土坑	65
図 20	掘立柱建物 3	26	図 61	300 土坑・319 土坑 (1) 出土遺物	66
図 21	掘立柱建物 4	27	図 62	319 土坑	67
図 22	掘立柱建物 5	28	図 63	361 土坑、366 土坑、367 土坑	68
図 23	掘立柱建物 6	29	図 64	372 土坑、375 土坑、400 土坑、437 土坑	69
図 24	掘立柱建物 7	30	図 65	436 土坑、438 土坑、520 土坑	71
図 25	掘立柱建物 8	31	図 66	319 土坑 (2)・344 土坑・367 土坑・372 土坑・ 436 土坑・438 土坑 出土遺物	72
図 26	掘立柱建物 9	32	図 67	641 土坑 出土石材	73
図 27	掘立柱建物 10	33	図 68	22 溝、73 溝、74 溝、85 溝、143 溝、238 溝、242 溝、 294 溝	75
図 28	掘立柱建物 11	34	図 69	22 溝・74 溝・85 溝・143 溝・238 溝・242 溝・ 294 溝 出土遺物	76
図 29	掘立柱建物 9・10・13・17・27 出土遺物	35	図 70	7 凹み・23 凹み・183 凹み 出土遺物	78
図 30	掘立柱建物 12	36	図 71	358 凹み 出土遺物	78
図 31	掘立柱建物 13	37	図 72	359 谷 出土遺物 (1)	79
図 32	掘立柱建物 14	38	図 73	359 谷 出土遺物 (2)	80
図 33	掘立柱建物 15	39	図 74	359 谷 出土遺物 (3)	81
図 34	掘立柱建物 17	40	図 75	時期別掘立柱建物・柱列	91
図 35	掘立柱建物 18	41			
図 36	掘立柱建物 19	42			
図 37	掘立柱建物 20	43			
図 38	掘立柱建物 21	44			
図 39	掘立柱建物 22	45			
図 40	掘立柱建物 23	46			
図 41	掘立柱建物 24	47			

写真図版目次

写真図版 1

1. 1区 東壁④（西から）
2. 1区 東壁⑧（西から）
3. 1区 東壁⑥（西から）
4. 1区 東壁③（西から）
5. 1区 西壁②⑤（東から）
6. 1区 西壁②⑧（東から）
7. 2区 北壁③③（南から）
8. 2区 北壁⑤⑥（南から）

写真図版 2

1. 3区 東壁①⑦（西から）
2. 3区 東壁①⑥（西から）
3. 3区 東壁①④（西から）
4. 3区 南壁①⑨（北から）
5. 3区 南壁②②（北から）
6. 3区 西壁②③（東から）
7. 6区 東壁北①①（西から）
8. 6区 東壁南①②（西から）

写真図版 3

1. 3区 西壁②③・②④（東から）
2. 5区 北壁②⑨（南から）
3. 5区 西壁②⑧（東から）

写真図版 4

1. 1区 全景（南から）
2. 1区 全景（東から）
3. 1区 全景（南から）

写真図版 5

1. 2区 全景（西から）
2. 3区 全景（東から）
3. 3区 全景（東から）

写真図版 6

1. 4区 全景（東から）
2. 5区 全景（西から）
3. 6区 全景（北から）

写真図版 7

1. 1区 掘立柱建物 1（西から）
2. 1区 掘立柱建物 1 8 柱穴（西から）
3. 1区 掘立柱建物 1 9 柱穴（西から）
4. 1区 掘立柱建物 1 10 柱穴（南から）
5. 1区 掘立柱建物 2 15 柱穴（南から）

写真図版 8

1. 1区 掘立柱建物 2（南から）

2. 1区 掘立柱建物 2 16 柱穴（南から）

3. 1区 掘立柱建物 2 17 柱穴（南から）

4. 1区 掘立柱建物 2 18 柱穴（南から）

5. 1区 掘立柱建物 3 76 柱穴（北から）

写真図版 9

1. 1区 掘立柱建物 3（東から）

2. 1区 掘立柱建物 3 78 柱穴（南から）

3. 1区 掘立柱建物 3 79 柱穴（南から）

4. 1区 掘立柱建物 3 80 柱穴（南から）

5. 1区 掘立柱建物 3 81 柱穴（南から）

写真図版 10

1. 1区 掘立柱建物 4（北西から）

2. 1区 掘立柱建物 4 119 柱穴（南西から）

3. 1区 掘立柱建物 4 120 柱穴（南西から）

4. 1区 掘立柱建物 4 121 柱穴（南西から）

5. 1区 掘立柱建物 4 122 柱穴（南東から）

写真図版 11

1. 1区 掘立柱建物 5（南西から）

2. 1区 掘立柱建物 5 107 柱穴（北東から）

3. 1区 掘立柱建物 5 108 柱穴（北東から）

4. 1区 掘立柱建物 5 109 柱穴（南西から）

5. 1区 掘立柱建物 5 111 柱穴（南西から）

写真図版 12

1. 1区 掘立柱建物 6（南西から）

2. 1区 掘立柱建物 6 114 柱穴（南西から）

3. 1区 掘立柱建物 6 115 柱穴（南東から）

4. 1区 掘立柱建物 6 116 柱穴（南東から）

5. 1区 掘立柱建物 7 153 柱穴（北から）

写真図版 13

1. 1区 掘立柱建物 7（西から）

2. 1区 掘立柱建物 7 154 柱穴（西から）

3. 1区 掘立柱建物 7 155 柱穴（南から）

4. 1区 掘立柱建物 7 156 柱穴（南から）

5. 1区 掘立柱建物 7 157 柱穴（東から）

写真図版 14

1. 1区 掘立柱建物 8（東から）

2. 1区 掘立柱建物 8 134 柱穴（北から）

3. 1区 掘立柱建物 8 135 柱穴（北から）

4. 1区 掘立柱建物 8 136 柱穴（北から）

5. 1区 掘立柱建物 8 138 柱穴（南から）

写真図版 15

1. 1区 掘立柱建物 9（北から）

2. 1区 掘立柱建物 9 163 柱穴（西から）

3. 1区 掘立柱建物 9 164 柱穴（南から）

4. 1区 掘立柱建物 9 168 柱穴（東から）

5. 1区 掘立柱建物 9 169 柱穴（北から）

写真図版 16

1. 1区 掘立柱建物 10（南から）

2. 1区 掘立柱建物 10 192 柱穴（南西から）

3. 1区 掘立柱建物 10 195 柱穴（南から）

4. 1区 掘立柱建物 10 196 柱穴（東から）

5. 1区 掘立柱建物 10 199 柱穴（北から）

写真図版 17

1. 1区 掘立柱建物 11（南から）

2. 1区 掘立柱建物 11 216 柱穴（西から）

3. 1区 掘立柱建物 11 217 柱穴（東から）

4. 1区 掘立柱建物 11 218 柱穴（東から）

5. 1区 掘立柱建物 11 213 柱穴（西から）

写真図版 18

1. 1区 掘立柱建物 12（南から）

2. 1区 掘立柱建物 12 230 柱穴（西から）

3. 1区 掘立柱建物 12 233 柱穴（東から）

4. 1区 掘立柱建物 12 234 柱穴（東から）

5. 1区 掘立柱建物 12 235 柱穴（東から）

写真図版 19

1. 1区 掘立柱建物 13（西から）

2. 1区 掘立柱建物 13 247 柱穴（南から）

3. 1区 掘立柱建物 13 248 柱穴（南から）

4. 1区 掘立柱建物 13 249 柱穴（南から）

5. 1区 掘立柱建物 13 253 柱穴（南から）

写真図版 20

1. 1区 掘立柱建物 14（東から）

2. 1区 掘立柱建物 14 267 柱穴（南から）

3. 1区 掘立柱建物 14 271 柱穴（南から）

4. 1区 掘立柱建物 14 272 柱穴（南から）

5. 1区 掘立柱建物 14 273 柱穴（南から）

写真図版 21

1. 1区 掘立柱建物 15（東から）

2. 1区 掘立柱建物 15 335 柱穴（東から）

3. 1区 掘立柱建物 15 336 柱穴（南から）

4. 1区 掘立柱建物 15 337 柱穴（南から）

5. 1区 掘立柱建物 15 338 柱穴（南から）

写真図版 22

1. 1区 掘立柱建物 17（西から）

2. 1区 掘立柱建物 17 315 柱穴（南から）
3. 1区 掘立柱建物 17 316 柱穴（南から）
4. 1区 掘立柱建物 17 326 柱穴（南から）
5. 1区 掘立柱建物 17 327 柱穴（南から）

写真図版 23

1. 3区 掘立柱建物 18（北から）
2. 3区 掘立柱建物 18 432 柱穴（西から）
3. 3区 掘立柱建物 19（東から）
4. 3区 掘立柱建物 19 442 柱穴（南から）
5. 3区 掘立柱建物 20（南から）
6. 3区 掘立柱建物 20 453 柱穴（東から）
7. 3区 掘立柱建物 22（東から）
8. 3区 掘立柱建物 22 402 柱穴（南から）

写真図版 24

1. 3区 掘立柱建物 21（東から）
2. 3区 掘立柱建物 21 460 柱穴（南から）
3. 3区 掘立柱建物 21 457 柱穴（南から）
4. 3区 掘立柱建物 21 459 柱穴（南から）
5. 3区 掘立柱建物 21 458 柱穴（南から）

写真図版 25

1. 3区 掘立柱建物 24（西から）
2. 3区 掘立柱建物 24 389 柱穴（南から）
3. 3区 掘立柱建物 24 338 柱穴（南から）
4. 3区 掘立柱建物 24 391 柱穴（南から）
5. 3区 掘立柱建物 24 393 柱穴（南から）

写真図版 26

1. 3区 掘立柱建物 23（南から）
2. 3区 掘立柱建物 23 410 柱穴（南から）
3. 1区 掘立柱建物 26（西から）
4. 1区 掘立柱建物 26 24 柱穴（南から）
5. 3区 掘立柱建物 27（西から）
6. 3区 掘立柱建物 27 503 柱穴（北から）
7. 3区 掘立柱建物 29（北から）
8. 3区 掘立柱建物 29 476 柱穴（西から）

写真図版 27

1. 1区 柱列3（南から）
2. 1区 柱列3 54 柱穴（西から）
3. 1区 柱列5（西から）
4. 1区 柱列5 321 柱穴（南から）
5. 1区 柱列6（東から）
6. 1区 柱列5 323 柱穴（南から）
7. 1区 柱列7（東から）
8. 1区 柱列7 298 柱穴（南から）

写真図版 28

1. 3区 柱列8（北から）

2. 3区 柱列8 470 柱穴（西から）
3. 3区 柱列9（西から）
4. 3区 柱列9 508 柱穴（南から）
5. 1区 83 土坑（北から）

6. 1区 83 井戸（北から）

7. 1区 21 土坑（南から）

8. 1区 42 土坑（南から）

写真図版 29

1. 1区 60 土坑（北から）
2. 1区 92 土坑（西から）
3. 1区 96 土坑（南から）
4. 1区 98 土坑（南から）
5. 1区 142 土坑（南から）
6. 1区 144 土坑（南から）
7. 1区 184 土坑（北から）
8. 1区 240 土坑（北から）

写真図版 30

1. 1区 259 土坑（南から）
2. 1区 300 土坑（北から）
3. 1区 344 土坑（北から）
4. 1区 351 土坑（南から）
5. 2区 319 土坑（南から）
6. 3区 361 土坑（西から）
7. 3区 366 土坑（南から）
8. 3区 367 土坑（南から）

写真図版 31

1. 3区 372 土坑（南から）
2. 3区 372 土坑（南東から）
3. 3区 375 土坑（南から）
4. 3区 400 土坑（南から）
5. 3区 436 土坑（西から）
6. 3区 436 土坑（西から）
7. 3区 437 土坑（西から）
8. 3区 438 土坑（南から）

写真図版 32

1. 3区 438 土坑（東から）
2. 3区 520 土坑（西から）
3. 3区 520 土坑（西から）
4. 1区 64・65 ピット（南東から）
5. 3区 482 ピット（北から）
6. 3区 518 ピット（東から）
7. 1区 22 溝（南から）
8. 1区 73 溝（西から）

写真図版 33

1. 1区 74 溝（南から）

2. 1区 85 溝（西から）
3. 1区 95 溝（南から）
4. 1区 143 溝（南から）
5. 1区 238 溝（西から）

6. 1区 239 溝（西から）

7. 1区 242 溝（南から）

8. 1区 279 溝（南から）

写真図版 34

1. 2区 294 溝（南西から）
2. 3区 373 溝（西から）
3. 3区 359 谷（西から）
4. 3区 359 谷（北から）
5. 3区 359 谷（東から）
6. 3区 359 谷（東から）
7. 3区 359 谷（東から）
8. 3区 359 谷（北から）

写真図版 35

遺物（1～15）

写真図版 36

遺物（16～25、28）

写真図版 37

遺物（26、27、29～37）

写真図版 38

遺物（38～48）

写真図版 39

遺物（49～58）

写真図版 40

遺物（59～65）

写真図版 41

遺物（66～74）

写真図版 42

遺物（75～84）

写真図版 43

遺物（85～91）

写真図版 44

遺物（92～104、106）

写真図版 45

遺物（105、107～114、139）

写真図版 46

遺物（115～117、119～121、133～138）

写真図版 47

遺物（124～132）

第1章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査の経緯と経過

既往の調査

調査地は、南河内郡河南町東山地内に所在し、学校法人塚本学院大阪芸術大学の敷地内にあたる。

東山遺跡に関わる調査は、昭和59（1984）年の大阪府教育委員会（現：大阪府教育庁）による同校の敷地拡張工事に伴う試掘調査が最初であった。この調査では、弥生時代後期の竪穴建物や、古墳の周溝と考えられる溝などの遺構を確認している。

昭和61（1986）年には同校のグラウンドと体育館用地の造成に伴って、河南町教育委員会が約5,800㎡の発掘調査に着手したが、諸事情により8年の中断期間を経て平成6（1994）年12月から平成7（1995）年7月にかけて調査を完了している。この調査では、弥生時代の集落のほか、古墳時代の土壌墓や古墳を確認している。

平成20（2008）年には、同校の南西側に広がる農地をグラウンドとする計画が持ち上がり、河南町教育委員会が同年9月に9箇所の試掘調査を実施し、遺構が確認された1,727㎡を対象に平成21（2009）年8月まで調査を行った。この調査では弥生時代後期の竪穴建物と方形周溝墓を検出したほか、飛鳥時代から平安時代にかけての地方豪族の居館と考えられる掘立柱建物や、鎌倉時代から室町時代の掘立柱建物を確認している。

調査の経緯

同校がキャラクター造形学科棟の新築を敷地内のグラウンド部分に計画したことにより、平成29（2017）年に河南町教育委員会との協議が行われた。平成30（2018）年10月26日付けで、河南町教育委員会、学校法人塚本学院、大成建設株式会社関西支店大阪芸術大学キャラクター造形学科棟新築工事作業所、株式会社島田組、公益財団法人大阪府文化財センター（以下 当センター）の5者による、発掘調査の実施に関し、必要な事項を定め、適正かつ円滑な発掘調査を図ることを目的とする協定書が結ばれた。これを受けて、平成30年10月31日付けで平成30年11月1日から令和2（2020）年1月31日までの委託契約を、株式会社島田組を委託者として当センターと締結した。一方、発掘調査にあたって河南町教育委員会が文化財保護法第99条の届け出を行い、当センターは平成30年11月1日より、現地調査を開始した。

調査の経過

発掘調査は、新築するキャラクター造形学科棟部分と、これにアクセスする道路部分が対象となった。

対象地が約4,418㎡と広範囲におよぶため、掘削土の仮置きや場内の通行などを考慮して、分割で実施することとし、調査区を着手順に1区から5区と呼称することとした。

以下、調査区ごとに調査開始から埋戻しまでの行程を記す。

1区は平成30（2018）年11月1日に調査を開始、平成31（2019）年1月23日に立会を実施、同年1月25日に空中写真測量および高所作業車による全景写真撮影、同年2月15日に埋戻しを完了。

2区は平成31年1月7日に調査開始、同年1月23日に立会を実施、同年1月25日に空中写真測量および高所作業車による全景写真撮影、同年2月15日に埋戻しを完了。

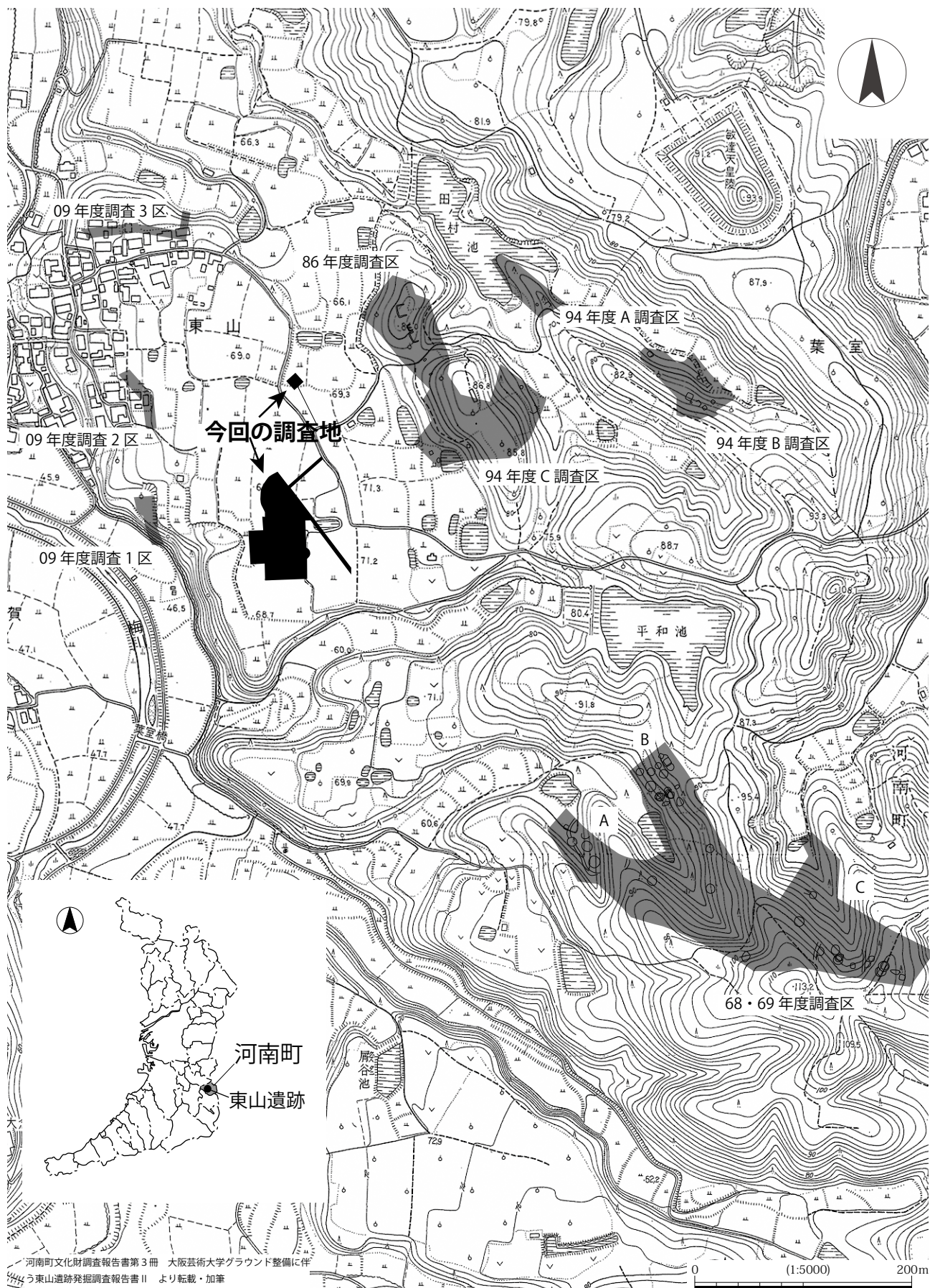


図1 調査地と既往の調査地

3区は平成31年1月15日調査開始、同年3月25日に立会を実施、同年3月28日に空中写真測量および高所作業車による全景写真撮影、同年4月17日に埋戻しを完了。

4区は平成31年2月20日に調査開始、同年3月25日に立会を実施、同年3月28日に空中写真測量および高所作業車による全景写真撮影、同年4月4日に埋戻しを完了。

5区は平成31年3月28日に調査開始、同年4月15日に立会を実施、同年4月17日に空中写真測量および高所作業車による全景写真撮影、同年4月19日に埋戻しを完了。

6区は平成31年4月3日に調査開始、同年4月15日に立会を実施、同年4月17日に空中写真測量および高所作業車による全景写真撮影、同年4月22日に埋戻しを完了。

平成31年4月24日に現地調査を終了し、物品移動と現場詰所撤収を行い、同年5月1日より中部調査事務所にて整理事業に着手した。整理事業は令和元(2019)年10月31日まで実施し、令和2(2020)年1月に報告書を刊行・配布し業務を終了した。

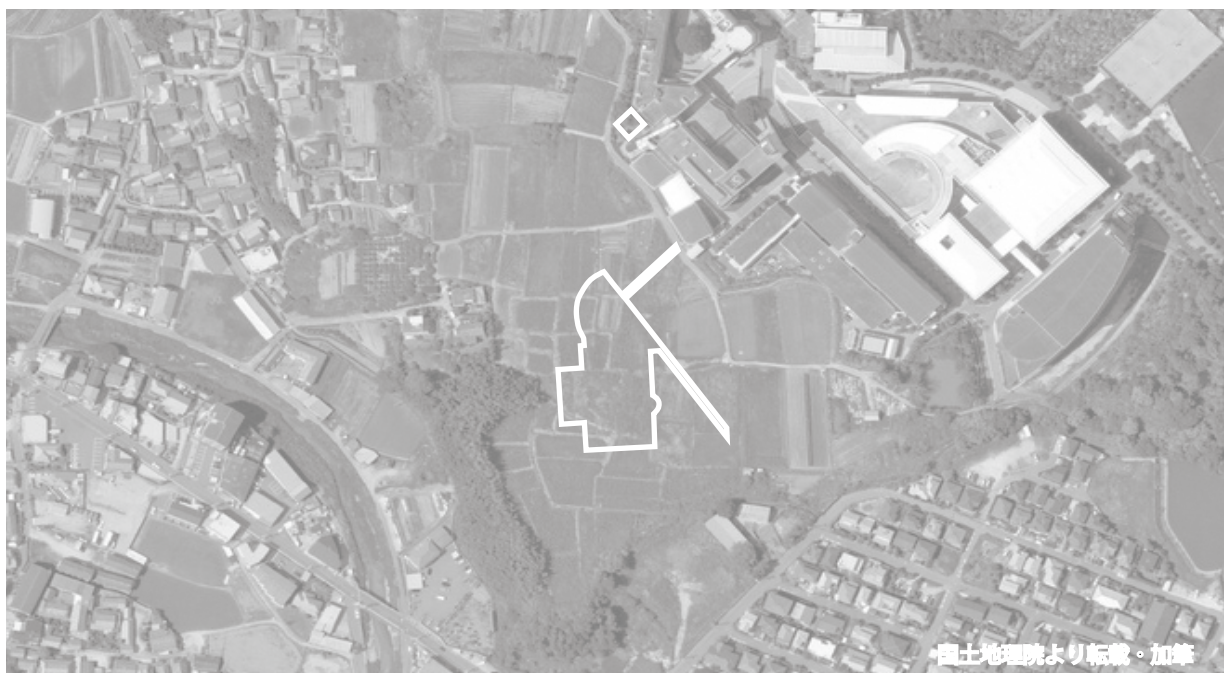


図2 今回の調査地

第2節 調査の方法

現地調査

調査地が位置するグラウンドは、耕作地を切土や盛土を行って造成している。発掘にあたってはその盛土と造成前の旧耕土、そして近世から中世の作土を重機を使って掘削しそののち、逐次人力による掘削に転換し調査を行った。人力掘削は、スコップ・ジョレン・手ガリなどを用いて、遺物の収集を行いながら慎重に行い、遺構の検出や掘り下げを行った。

あわせて記録保存のため、検出した遺構や遺物の出土状況の平面図、断・立面図の作成および写真撮影を行った。測量手法は、オフセット測量の手実測のほか、デジタル写真測量も利用している。また、検出した遺構の配置図は、電子平板を使用して作成した。

調査区全体の平面図の作成には、ラジコンヘリをカメラステーションとした空中写真測量を実施した。

使用したカメラは、フルサイズのカメラセンサーを搭載したデジタル一眼レフカメラを用い、デジタル写真測量より 50 分の 1 の図化を行っている。なお、空中写真測量時にはラジコンヘリから調査区を含めた遠景を、中版カメラを用いてリバーサルフィルムで撮影し、あわせてフルサイズのカメラセンサーを搭載したデジタル一眼レフカメラによる撮影も行っている。なお、デジタルカメラ撮影では、RAW と JPG のデータを取得している。また、調査全体を俯瞰し、検出した遺構や遺構面の状況を記録するために、高所作業車を用いた撮影も実施した。調査記録用の写真は、6×7 白黒フィルムと APS-C カメラセンサーを搭載したデジタル一眼レフカメラによる撮影を行い、特に重要なものについては 6×7 リバーサルフィルムによる撮影も行った。デジタルカメラ撮影では、RAW と JPG のデータを取得した。

図面や写真などの調査記録は、A2 版図面 111 枚、フィルム 150 カット、RAW データ 1,973 ファイルを数え、すべてに関して台帳や一覧表を作成した。

出土した遺物については、当センターの『遺跡調査基本マニュアル 2010』に従い、世界測地系に基づく平面直角座標系第Ⅵ系により設定した、10 m 区画による取り上げを行った。取り上げた遺物には、調査区名・地区割・層位名・遺構名・出土年月日・登録番号などを記したマイラーラベルを添付し、出土地点の情報を記録した。遺物は登録後、洗浄を行い注記を行った。遺物は登録番号毎にデジタルカメラで撮影し、出土遺物データベースの作成を行った。

各調査区の終了時には、河南町教育委員会の現地立会を実施し報告を行い調査に関する指導を受けた。

整理作業

上記の様にして得られた、図面や写真、遺物を中部調査事務所において整理作業を行い、報告書作成を行った。遺構図版については、図面が手実測の場合、スキャニングを行いデジタル化した上で作成を行った。デジタル写真測量および電子平板を使用して作成した図面、空中写真測量により作成した図面の場合は、デジタル化されているため直接作成作業を行った。作成にあたっては、Adobe 社 IllustratorCS6 を用いた。

遺構写真図版については、必要な写真の RAW データの色調補正やサイズ編集を、Adobe 社 Photoshop CS6 を用いて行い、TIFF データに変換し作成した。

遺物図版については、報告書に掲載すべきものを抽出した上で必要なものに復元作業を施し、手実測による図化を行った。作成した実測図は、スキャニングを行いデジタル化し、IllustratorCS6 を用いて遺物図版を作成した。また、遺物写真図版を作成するため、当センター写真室においてデジタル一眼レ

フカメラを用いた撮影を行い、RAW データを取得後、色調補正やサイズ編集を行い TIFF データを作成した。作成した図面データや写真データは、文字原稿とあわせ Adobe 社 IndesignCS6 を用いて印刷原稿を作成している。これに並行し、すべての図面や写真、遺物に関する収納作業を行い、掲載情報や保管情報が記されたデータベースを作成した。

以上の整理作業ののち、印刷・製本・発送を行いすべての作業を終了した。

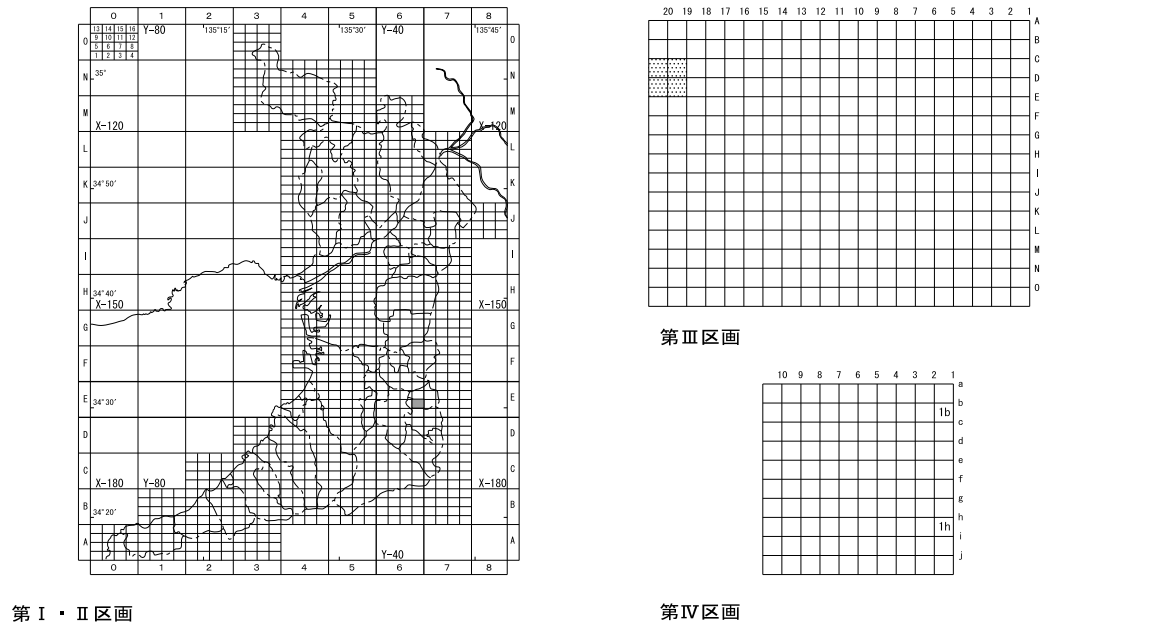


図3 地区割り図

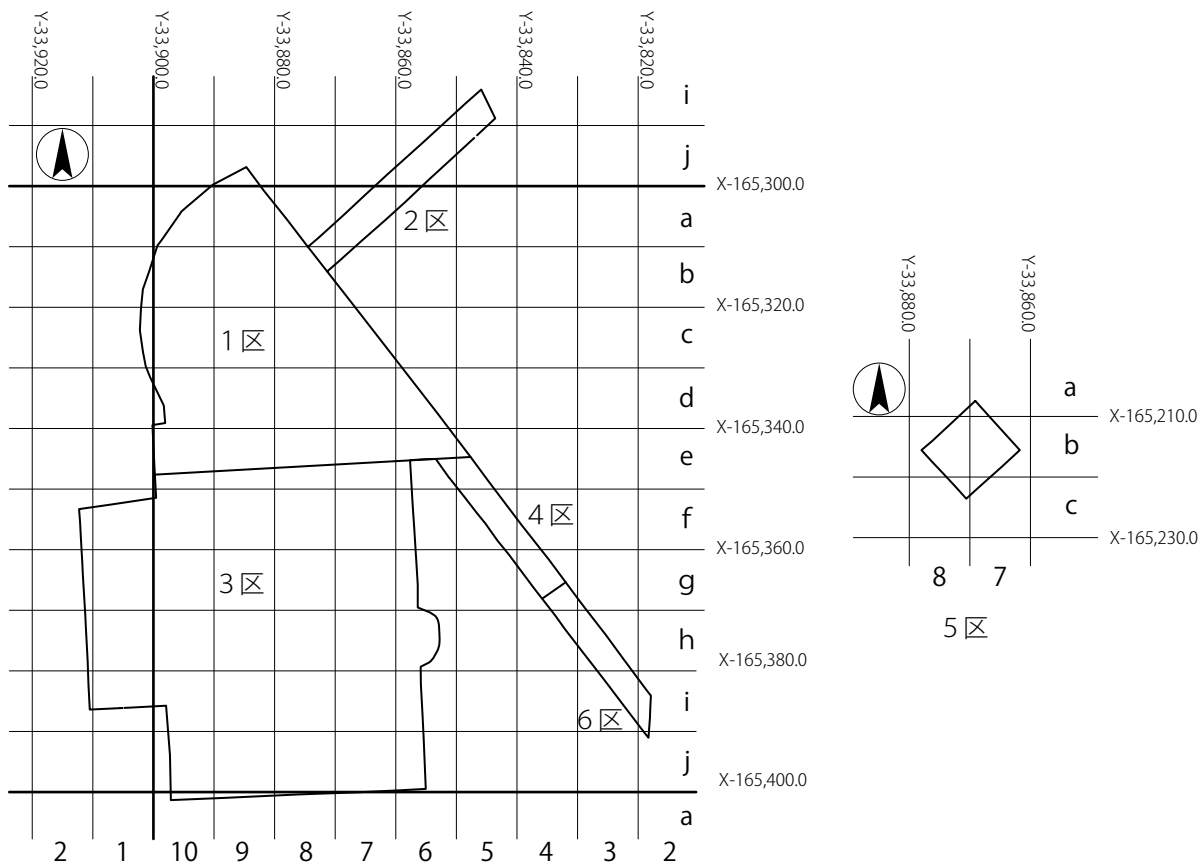


図4 調査区割り図

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

東山遺跡が所在する河南町は、大阪府の東南部にある南河内郡に所在する。北、西、南にはそれぞれ太子町、富田林市、千早赤阪村が接しており、東は葛城山を介して奈良県葛城市と御所市と接する。

河南町は大きく葛城山地と河南台地に区分できる。葛城山地は北の竹之内峠から南の水越峠の間の延長約8kmにおよび、標高約950mから600mを測る南から北へ次第に高くなる山脈と、その西側に位置する前山からなる。山脈と前山は谷により画されており、前山は「一のはげ山塊」と呼ばれる丘陵を含む3つの丘陵から形成される。この丘陵の西には、石川の本流や支流による河岸段丘が形成されている。河岸段丘は河南台地と呼ばれ、河南台地上には河南町の中心が位置する。

地質を大きくみると、葛城山地は領家花崗岩類により形成されており、西側には段丘礫層と大阪層群が広がる。「一のはげ山塊」などの前山はほぼ大阪層群にあたり、砂礫と泥で形成されているため浸食が激しく、小規模ではあるが扇状地がみられる。この扇状地は土壤に砂礫を多く含むことから、現在で

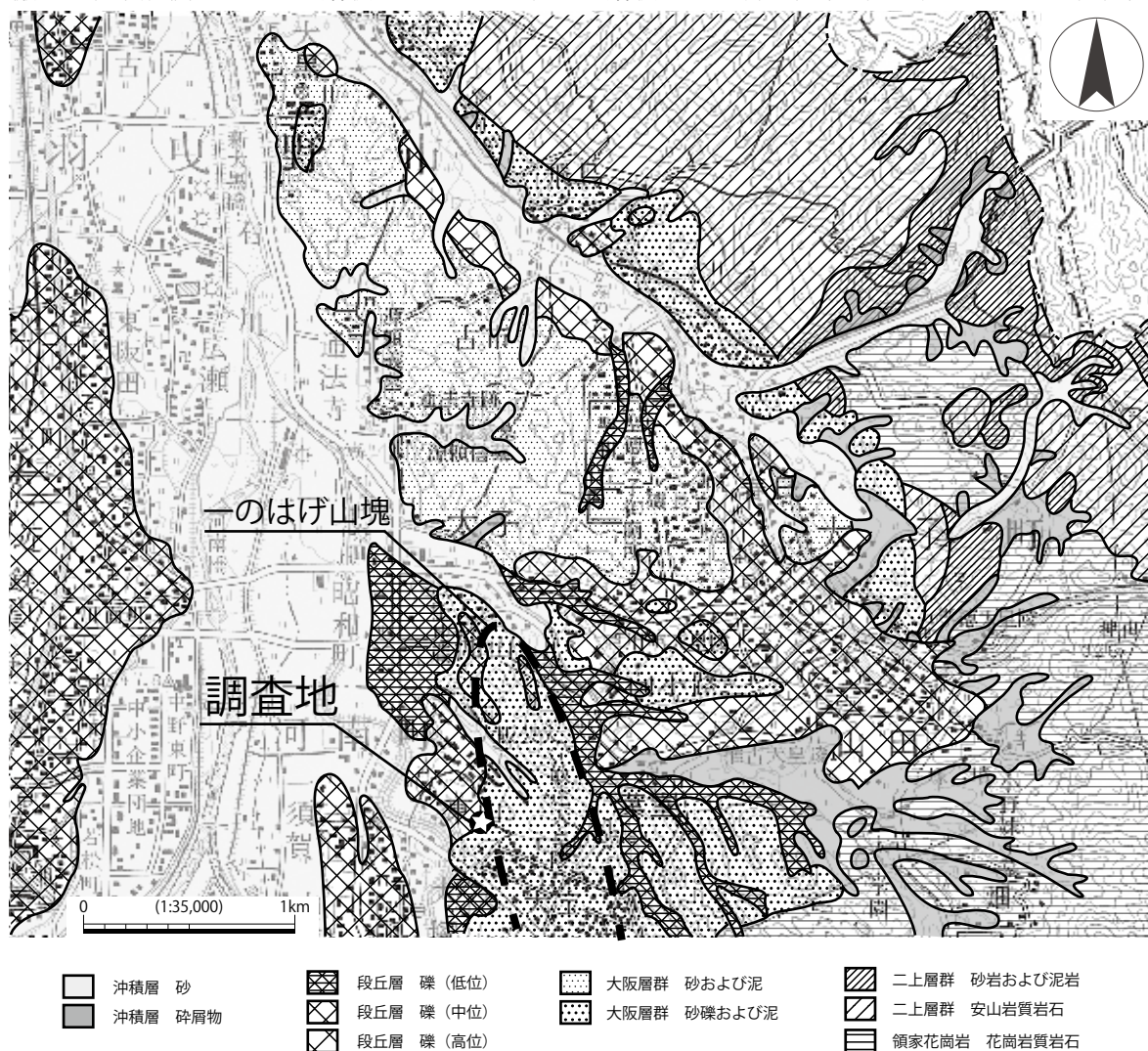


図5 調査地周辺の地質図

はぶどう畑やお茶畑に利用されている。なお、今回の調査地は「一のはげ山塊」の北西縁辺部にあたり、大阪層群と中位段丘礫層にまたがって位置している。

河南町の北、太子町には大阪と奈良を結ぶ前述の竹之内街道があり、街道の北側には約 1,000 万年前に火山活動が終息したと考えられている二上山が位置する。二上山は瀬戸内火山系に属し、二上層群と呼ばれる安山岩質岩石、凝灰岩、砂岩および泥岩、礫岩で形成される。二上山の活動の最後に噴出された春日山火山岩は、サヌカイトと呼ばれ岩質は花崗閃緑岩、または安山岩である。これらサヌカイトや凝灰岩、ざくろ石安山岩の風化堆積物は古くから利用されており、河南町域も含めて本地域一帯を特徴付ける産物である。

第2節 歴史的環境

当地域の歴史的環境については、河南町教育委員会から刊行されている東山遺跡の発掘調査報告書に詳しく述べられているため、ここではそれらを基に簡単に記す。

旧石器時代

当地域では調査が十分におよんでいないが、二上山北麓では旧石器時代の石材採掘坑や加工場が確認されている。

縄文時代

遺構は確認されていないが、神山遺跡、寛弘寺遺跡、山城廃寺、錦織遺跡、西板持遺跡などで縄文土器が出土している。神山遺跡では、河道からローリングをあまり受けていない縄文早期の押型文土器や、中期末と考えられる加曽利E式系の文様を有する土器が出土しているほか、包含層中から中期末から後期初頭の土器が出土している。また、ミヤケ北遺跡からは縄文晩期の滋賀里Ⅲ式期の土器棺墓や土坑が確認されている。

弥生時代

弥生時代前期の遺跡としては東阪田遺跡があげられるが、遺構は確認されていない。中期では、石川を望む段丘上に喜志遺跡、中野遺跡、甲田南遺跡などで集落跡が確認されている。中でも喜志遺跡、中野遺跡はサヌカイトの原石、石器未製品、石屑やチップが多量に出土していることから石器製作の集落と考えられている。後期になると丘陵上に集落が形成される。いわゆる高地性集落で、駒ヶ谷遺跡、御嶽山遺跡、チンチの森遺跡、葉室西峰遺跡、寛弘寺遺跡、神山遺跡、東山遺跡があげられる。寛弘寺遺跡では、尾根上に百数十棟を超える竪穴建物が確認されている。

古墳時代

石川谷周辺では古墳時代前期前葉の古墳は未だ確認されておらず、石川西岸の真名井古墳（前方後円墳）が初現である。真名井古墳の西には、前期後葉の鍋冢古墳（円墳）がみられる。石川と千早川の中間の丘陵には、前期中葉の板持丸山古墳（円墳）、次いで板持3号墳（前方後円墳）。石川東岸の太子町から羽曳野市にかけての丘陵上に、前期中葉の壺井丸山古墳（前方後円墳）、九流谷古墳（前方後円墳）、次いでお旅山古墳（前方後円墳）、通法寺裏山古墳（前方後円墳）がみられる。中期に入ると前方後円墳はみられなくなり、この地域に再び前方後円墳が築かれるのは後期中葉になってからである。このような造墓の動きは、中期初頭に造墓が開始され後期中葉に終了する古市古墳群との関係が指摘できよう。

しかしその一方で、寛弘寺古墳群では前期中葉に開始された造墓活動が中期、後期、終末期へと連綿

と続くことから、ここでは在地の造墓主体の存在を指摘できる。後期になると、一須賀古墳群や飛鳥千塚古墳群といった群集墳が形成される。一須賀古墳群は、200基以上の古墳からなり、そのほとんどが横穴式石室を持つ円墳で、出土遺物や石室構造から、造墓主体には渡来系氏族が考えられている。

前方後円墳築造停止後、河南台地の最奥部に金山古墳（双円墳）が築かれる。金山古墳は、全長85.8mを測り、北丘には横穴式石室を内部主体とし、2個の刳拔式家形石棺が納められている。南丘にも墓道が確認されており、横穴式石室を内部主体とすることがわかっている。磯長谷にも向山古墳（方墳）、高松古墳（長方墳）、葉室塚（長方墳）、上城古墳（円墳）などがあり、異論はあるが陵墓に比定されており磯長谷の大型古墳が王陵クラスであることは言えよう。

また、一須賀古墳群の南、平石峠を通過して大和へ通じる平石谷には、平石古墳群が広がる。貼石や敷石を伴う墳丘を3段もち、基壇部で40mを超える大形の長方墳3基で、横穴式石槨を有する。

古墳時代の集落としては、中期の竪穴建物が数棟密集して確認された神山遺跡があげられる。神山遺跡は、千早川を挟んで対岸に寛弘寺古墳群があり、寛弘寺古墳群との関係が考えられている。このほか、前期・中期の竪穴建物が確認された上所遺跡、中期の竪穴建物が確認された伽山遺跡などがあるが、前述した古墳の数に比べ、確認されている集落遺跡は圧倒的に少ない。

古代以降

前方後円墳が終焉する頃には、寺院が建立され始める。石川谷付近の古代寺院としては、新堂廃寺があげられる。創建は飛鳥時代で、白鳳期の再建伽藍の一部が確認されている。その他の古代寺院は、瓦が採集されているのみで、伽藍など不明な寺院が多い。

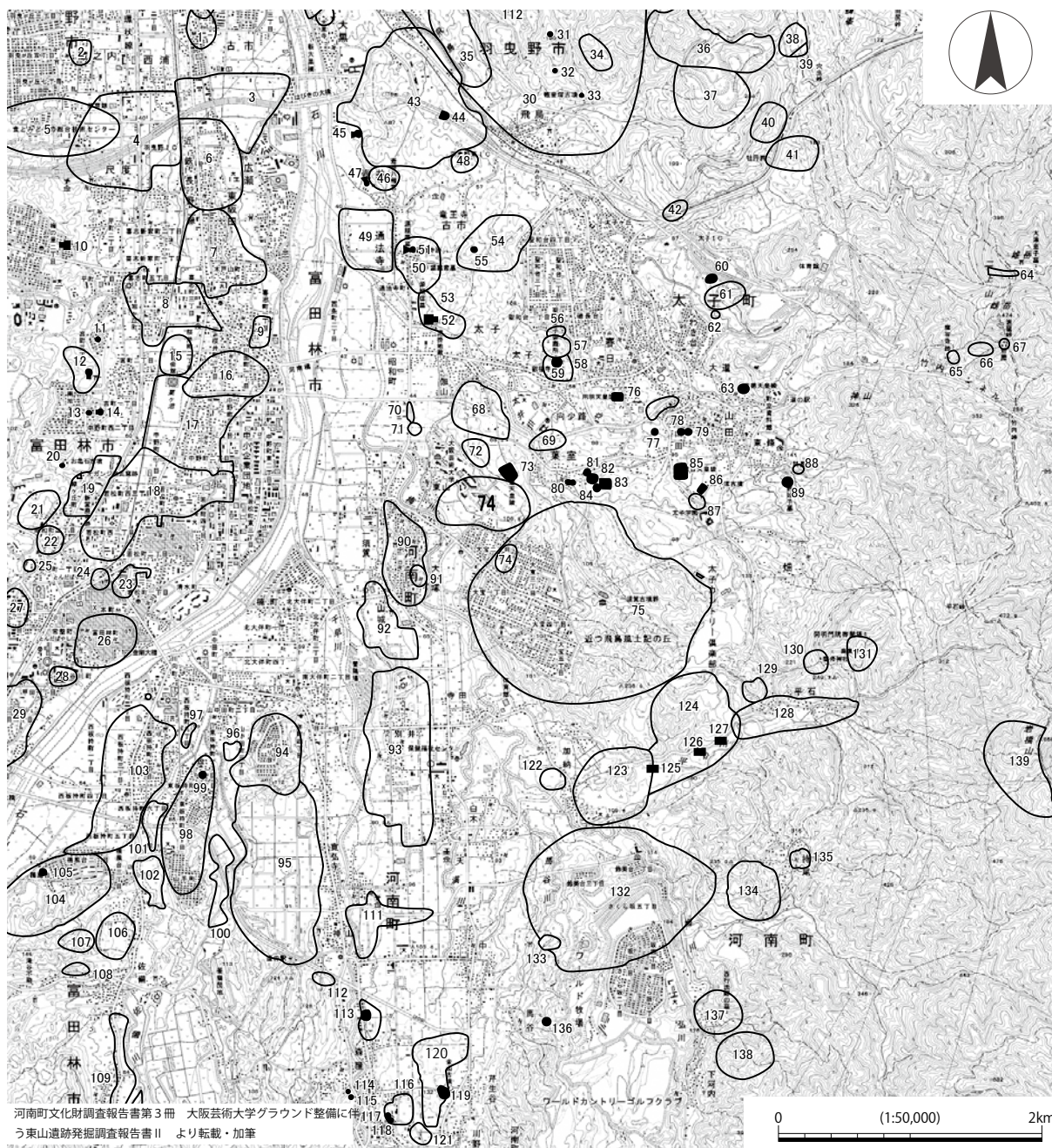
山城廃寺も白鳳期の瓦片の採集や礎石の発見などで、古代の寺院として周知されているが、詳細は不明である。当遺跡では平成19年から21年にかけて大阪府教育委員会が発掘調査を行い、古墳時代から平安時代末頃まで存続した集落を確認している。特に大形の掘方を持つ建物の柱列は、山城廃寺に関わる施設であることが指摘されている。

このほか寺院としては、奈良時代に造営された鹿谷寺跡と岩屋があげられる。両者とも二上山麓の凝灰岩石切場跡を利用して作られた寺院であり、石窟寺院として位置づけられるものである。

奈良時代から平安時代以降、中世にいたるまで、石川、佐備川、千早川とその支流の段丘上には中野遺跡、神山遺跡などの集落跡が確認できる。神山遺跡の周辺は楠木正成ゆかりの地である千早赤阪村に近いこともあり、陣屋山遺跡、持尾遺跡、平石城などの南北朝期の城跡も数多く存在している。

室町時代以降には、大ヶ峰や富田林で寺院を中心に町家が興り発展していく。

そして、近世になると石川郡、古市郡にまたがる一万石の代官所として、白木と東山に陣屋が設けられる。



1. 城山遺跡 2. 蔵之内遺跡 3. 西浦東遺跡 4. 尺度遺跡 5. 農林センター散布地 6. 東阪田遺跡 7. 喜志遺跡 8. 喜志西遺跡 9. 喜志南遺跡
10. 平1号墳 11. 鍋塚古墳 12. 宮神社裏山古墳群 13. 宮前山古墳 14. 真名井古墳 15. 栗ヶ池遺跡 16. 桜井遺跡 17. 中野北遺跡 18. 中野遺跡
19. 新堂廃寺 20. お亀石古墳 21. 新堂古墳群 22. 新堂南遺跡 23. 畑ヶ田遺跡 24. 堀ノ内遺跡 25. 明楽遺跡 26. 富田林寺内町遺跡 27. 毛人谷遺跡
28. 谷川遺跡 29. 甲田遺跡 30. 飛鳥千塚古墳群 31. 鉢状山南峰古墳 32. 観音塚上古墳 33. 観音塚古墳 34. オウコ古墳群 35. 駒ヶ谷古墳群
36. 石万尾遺跡 37. 株山遺跡 38. ドンズルポー遺跡 39. ドンズルポー石切場跡 40. 穴虫峠遺跡 41. 牡丹洞石切場遺跡 42. 柏峯遺跡
43. 駒ヶ谷遺跡 44. 蔵塚古墳 45. 壺井丸山古墳 46. お旅山遺跡 47. お旅山古墳 48. 河内飛鳥寺跡 49. 通法寺条里遺構 50. 通法寺遺跡
51. 通法寺裏山古墳 52. 九流谷古墳 53. 九流谷遺跡群 54. 御嶺山遺跡 55. 御嶺山古墳 56. チンチの森遺跡 57. 叡福寺遺跡 58. 上城古墳(聖徳太子墓)
59. 叡福寺 60. 茶臼山古墳(紀古継墓誌出土地) 61. 地獄谷遺跡(旧妙見寺) 62. 片原山遺跡(采女竹良聖域碑出土地) 63. 上ノ山古墳(孝徳天皇陵)
64. 二上山城 65. 鹿谷寺跡 66. 岩屋峠西方石切場跡 67. 岩屋 68. 伽山遺跡・伽山古墳 69. 上所遺跡 70. ミヤケ北遺跡 71. ミヤケ遺跡
72. 葉室西墓遺跡 73. 奥城古墳(敏達天皇陵) 74. 東山遺跡 75. 一須賀古墳群 76. 向山古墳(用明天皇陵) 77. 山田西古墳 78. 松井塚古墳
79. 仏陀寺古墳 80. 塚穴古墳 81. モンド塚古墳 82. 釜戸塚古墳 83. 葉室塚古墳 84. 石塚古墳 85. 高松古墳(推古天皇陵) 86. 二子塚古墳
87. 長野前遺跡 88. 万法蔵院跡 89. 伝小野妹子墓 90. 大ヶ塚寺内町遺跡 91. 大ヶ塚城跡 92. 山城廃寺 93. 別井遺跡 94. 西大寺山古墳群・篝山城跡
95. 寛弘寺遺跡・古墳群 96. 山中田北遺跡 97. 梅田遺跡 98. 板持古墳群 99. 板持丸山古墳 100. 尾平遺跡 101. 柿ヶ坪遺跡 102. 下佐備南遺跡
103. 西板持遺跡 104. 彼方遺跡 105. 彼方丸山古墳 106. 佐備神社南遺跡 107. 柳谷南遺跡 108. イタイゴ古墳群 109. 佐備川西岸遺跡 110. 岸之本遺跡
111. 神山遺跡 112. 神山丑神遺跡 113. 大森遺跡・大森塚古墳 114. 森屋1号墳 115. 森屋2号墳 116. 御旅所遺跡 117. 御旅所北古墳 118. 御旅所古墳
119. 金山古墳 120. 芹生谷遺跡・石塚古墳 121. 川野辺遺跡 122. 加納遺跡 123. 加納古墳群 124. 平石古墳群 125. シシヨツカ古墳
126. アカハゲ古墳 127. ツカマリ古墳 128. 平石遺跡 129. 平石城跡 130. 磐船神社遺跡 131. 高貴寺 132. 白木古墳群 133. 下河内散布地
134. 持尾遺跡 135. 持尾城跡 136. 馬谷古墓 137. 弘川寺 138. 陣屋山城跡 139. 持尾古墳群

図6 調査地周辺の遺跡

第3章 基本層序

調査地が位置するグラウンドは耕作地を造成して整備されており、造成工事に際して地形の高い部分を削り低い部分に盛土を行い、さらにその上に盛土を行っている。このため、旧耕土およびそれ以下の作土や土壌が削平されている箇所がみられた。グラウンド造成前の地形を、航空写真や地形図、調査で確認された地層からみると、北東から南西へ緩やかに下がっていく地形を利用して、耕作地を造っている。また、3区の南西付近には西側へ開く谷がみられ、5区として調査した部分でも北東から南西へ延びる谷の南東肩を確認している。

図7に位置を示す図8から図14の柱状図を作成した箇所は、上述のグラウンド造成工事の影響を大きく受けている箇所とそうでない箇所、また中世から近世にかけての耕作が下層までおよんでいる箇所とそうでない箇所、層の遺存状況が異なる。これらの点を踏まえて、当調査地における基本層序を示すと、現地表から下位へ順に、現表土、グラウンド造成時の盛土、旧耕土と呼称した近代から現代の作土、近世作土、中世作土、基盤層となる。ほとんどの場所で、中世作土の直下に基盤層がみられることから、中世以前の時期の土壌は、中世段階の耕作により失われていると考えられる。

なお、3区で検出した谷内では、古代～弥生時代の土壌が削平をまぬがれて残っていた。

図8の1区と4区、6区の東壁の柱状図①～⑫により、基本層序の層相について記す。

1は現表土、2はグラウンド造成時の盛土、3は旧耕土と呼称した近代から現代の作土である。4は近世の作土で、にぶい黄橙色細粒砂シルト混じりである。全体的に砂っぽく、上面には鉄分の沈着がみられる。5は中世の作土で、黄橙色細粒砂シルト混じりで中から極粗粒砂を多く含む。層中には土器片や炭化物などを含み、マンガンの沈着がみられる。いわゆる包含層として捉えられる。6は基盤層で、黄橙色シルトで細粒砂がやや混じり、中から極粗粒砂を含む。基盤層は場所により層相が異なり、シルトを主とする部分と、中から極粒砂で細礫を含む層、または細礫から中礫に細から極粗粒砂が混じる部分がみられる。遺構検出は、5の中世作土を除去して、6の基盤層上面で行っている。

このほか、3区と5区で検出した谷は、他と異なる地層がみられるので以下に、層相について記す。

図12の⑭は3区で検出した谷の南北横断である。1は現表土、2-1・2-2・2-3・2-4はグラウンド造成時の盛土、3は旧耕土、4は近世作土で、褐色細粒砂で若干シルトが混じり、上面に鉄分が沈着する。5も近世作土で、黄褐色細粒砂シルト混じりで中から極粗粒砂を多く含む。6は中世作土で、灰黄褐色細粒砂シルト混じりで中から極粗粒砂を多く含む。また、谷中心部はグラウンド造成時まで棚田状の耕作地となっており、近世から現代にかけて谷外より一段低い耕作面を形成している。この部分では中世作土が確認できず中世期の様子は不明であるが、おそらく同様な状況であったと考えられる。

中世作土および谷中心部の近世作土下から基盤層までには、調査時に谷埋土上層とした8の灰黄褐色細粒砂シルト混じり中から極粗粒砂を含み、細礫から中礫を若干含む土壌層と、9の灰黄褐色細粒砂シルト混じり中から極粗粒砂を多く含み、細礫から小礫を多く含む土壌層がみられる。古代に属する層準と考えられ、おそらく谷を部分的に埋め立てたと考えられる層である。なお、両層中から黒色土器や瓦器が出土していない。9の下層には、調査時に谷埋土下層とした、10の黒褐色細粒砂シルト混じり中から極粗粒砂を多く含み、細礫から中礫を多く含む土壌層。11の黄褐色シルト細粒砂混じり中砂から

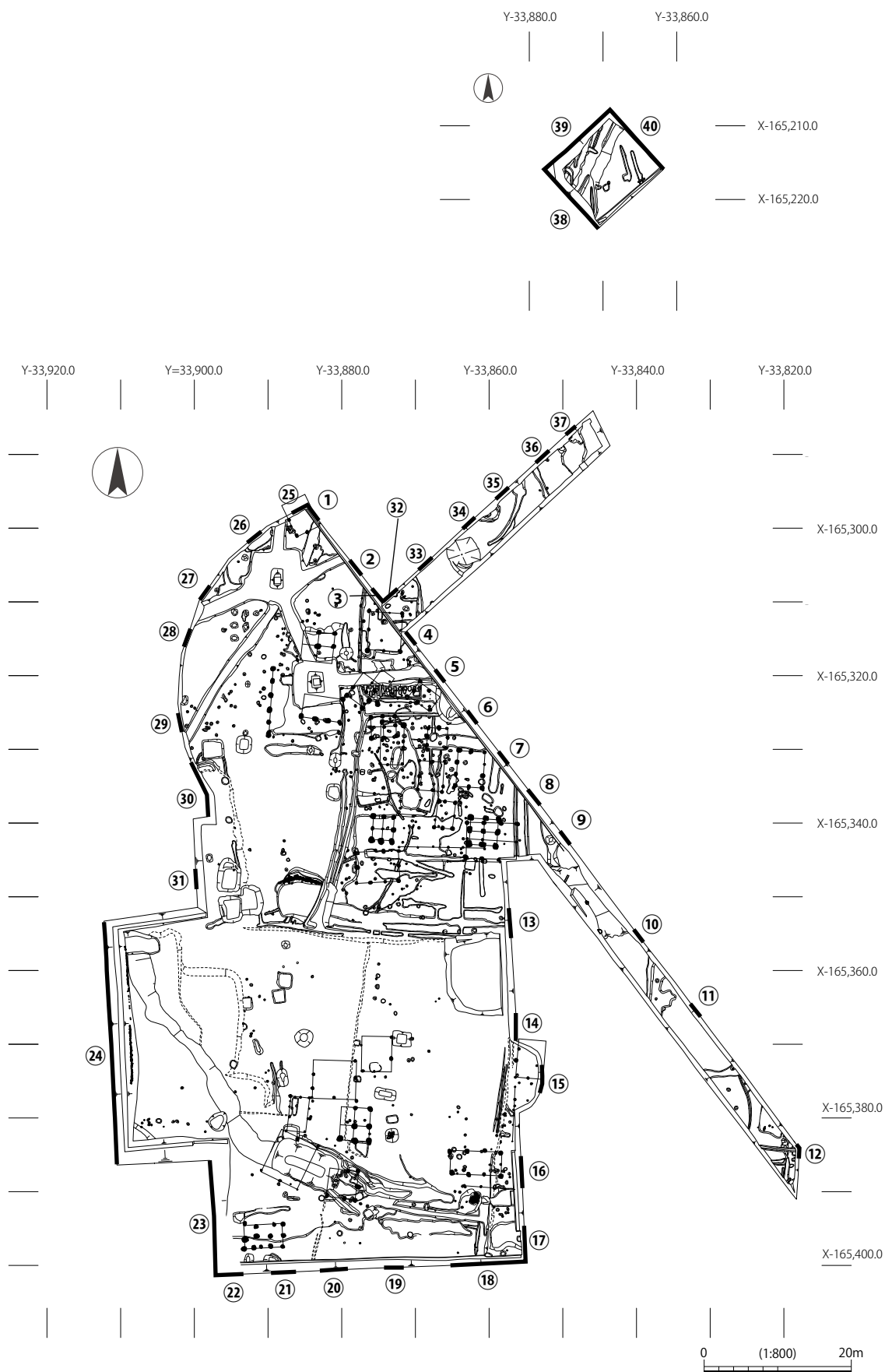


图7 柱状图位置图

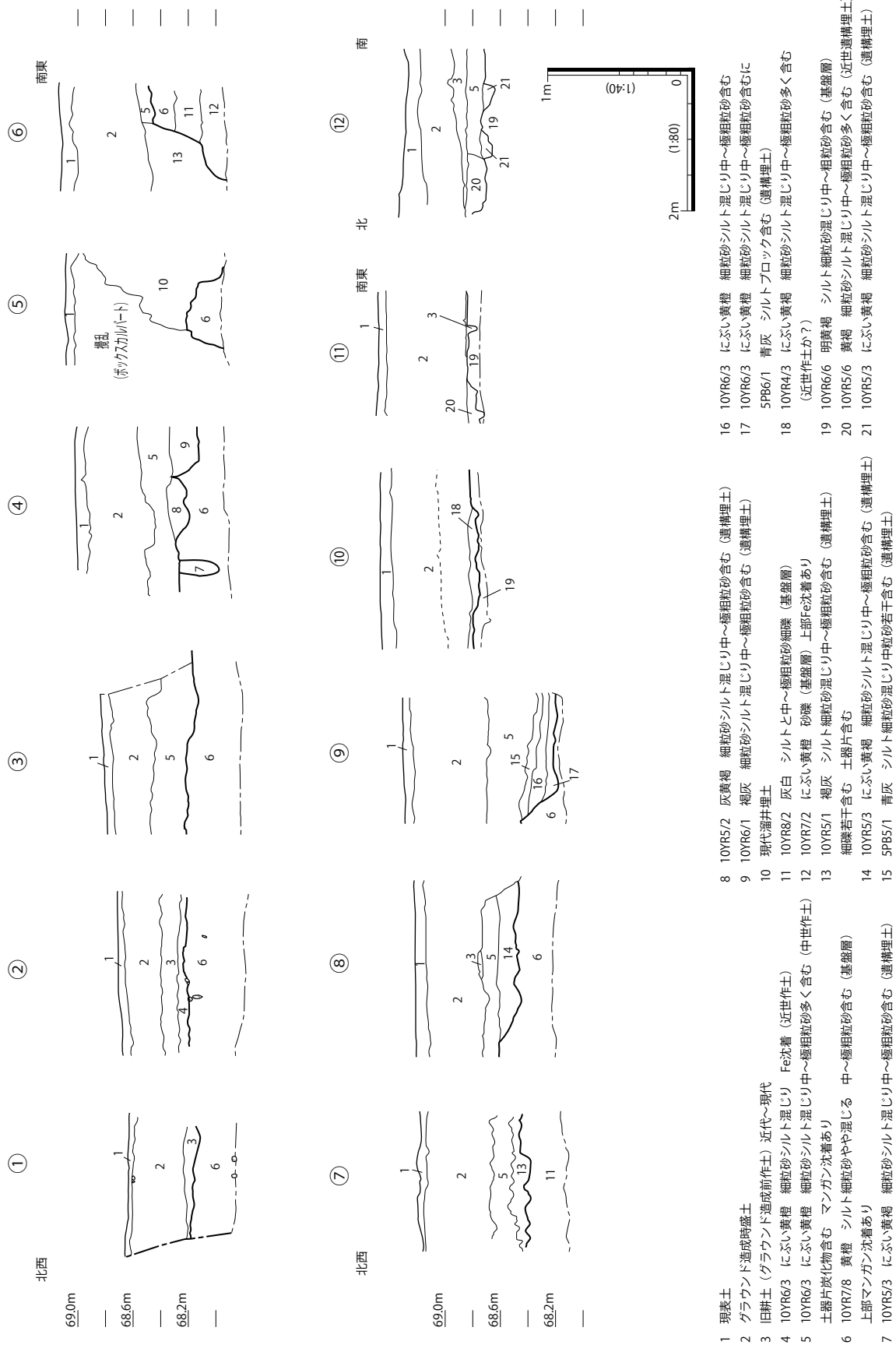


図8 1区・4区・6区東壁 (①から⑫)

極粗粒砂を多く含み、細礫から中礫を含む土壌層。12 のにぶい黄橙色シルト細粒砂混じり中から極粗粒砂と細礫から中礫を多く含む土壌層がみられる。主に 10 の層中から、弥生時代中期から後期にかけての土器が出土しており、10 は当該期に属する層準と考えられる。

本調査地では 5 区で、もう 1 つ谷を確認している。図 14 の③は谷の南北縦断である。5 区ではグラウンドの造成に伴う影響は受けておらず、また大学の校舎建築に伴う削平なども受けていない。以下、層相について記述する。

1 は現表土、2 と 2' は校舎建設時の盛土、3 は校舎建設前の近代から現代の作土で、旧耕土と呼称している。旧耕土の下層には、近世作土と考えられる、4 はにぶい黄褐色細粒砂シルト混じりで中から極粗粒砂を含み、鉄分の沈着がみられる。5 は暗褐色細粒砂シルト混じりで中から極粗砂粒を含み、層中に細砂が層状にみられる。6 は褐色細粒砂シルト混りで中から極粗砂粒を含み、細礫を含む。5・6 と、③断面にみられる 7・8 は作土と考えられる。9 は出土遺物から中世作土と考えられる層準で、明黄色細粒砂シルト混じりで中から極粗砂粒を含み、直径約 5 cm 円礫を若干含む。やや暗色化している。12 から 14 も中世の作土と考えられる、12 はにぶい黄褐細粒砂シルト混じりで中から極粗砂粒を含み、直径約 5 cm 円礫を若干含む。13 は灰黄褐色細粒砂シルト混じりで中から極粗砂粒を含み、直径 5 ～ 8 cm の円礫を多く含む。やや暗色化している。14 はにぶい黄褐色細粒砂シルト混じりで中から極粗砂粒を含み、直径 5 ～ 8 cm の円礫を若干含む。15 は黒褐色細粒砂シルト混じりで、中礫から細礫を多く含む。層中から中世の土師器片が出土している。16 は灰黄褐色細粒砂シルト混じりで中粒砂から細礫を多く含む。17 は暗褐色細粒砂シルト混じりで中から極粗砂粒多く含む。

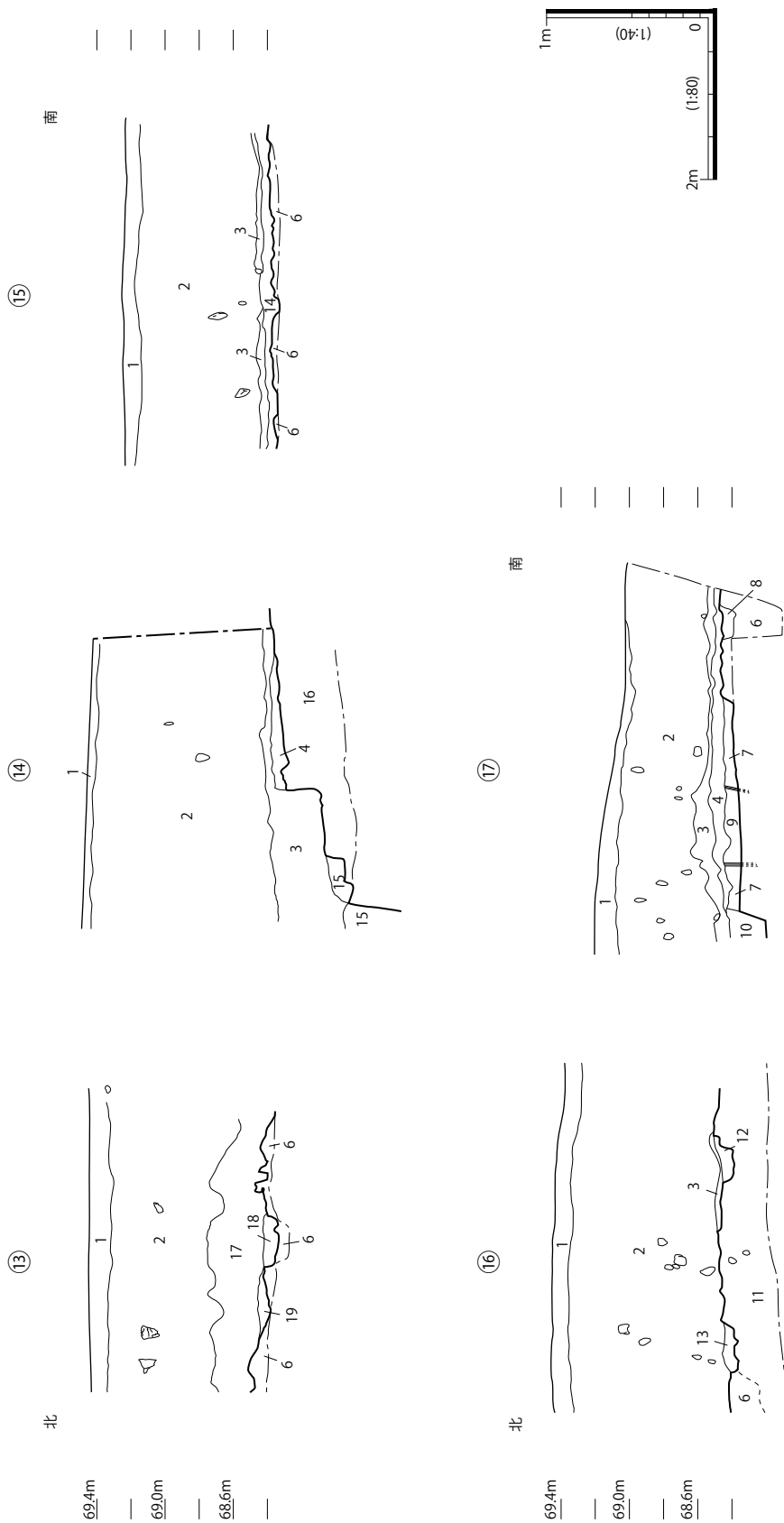


図9 3区東壁 (13から17)

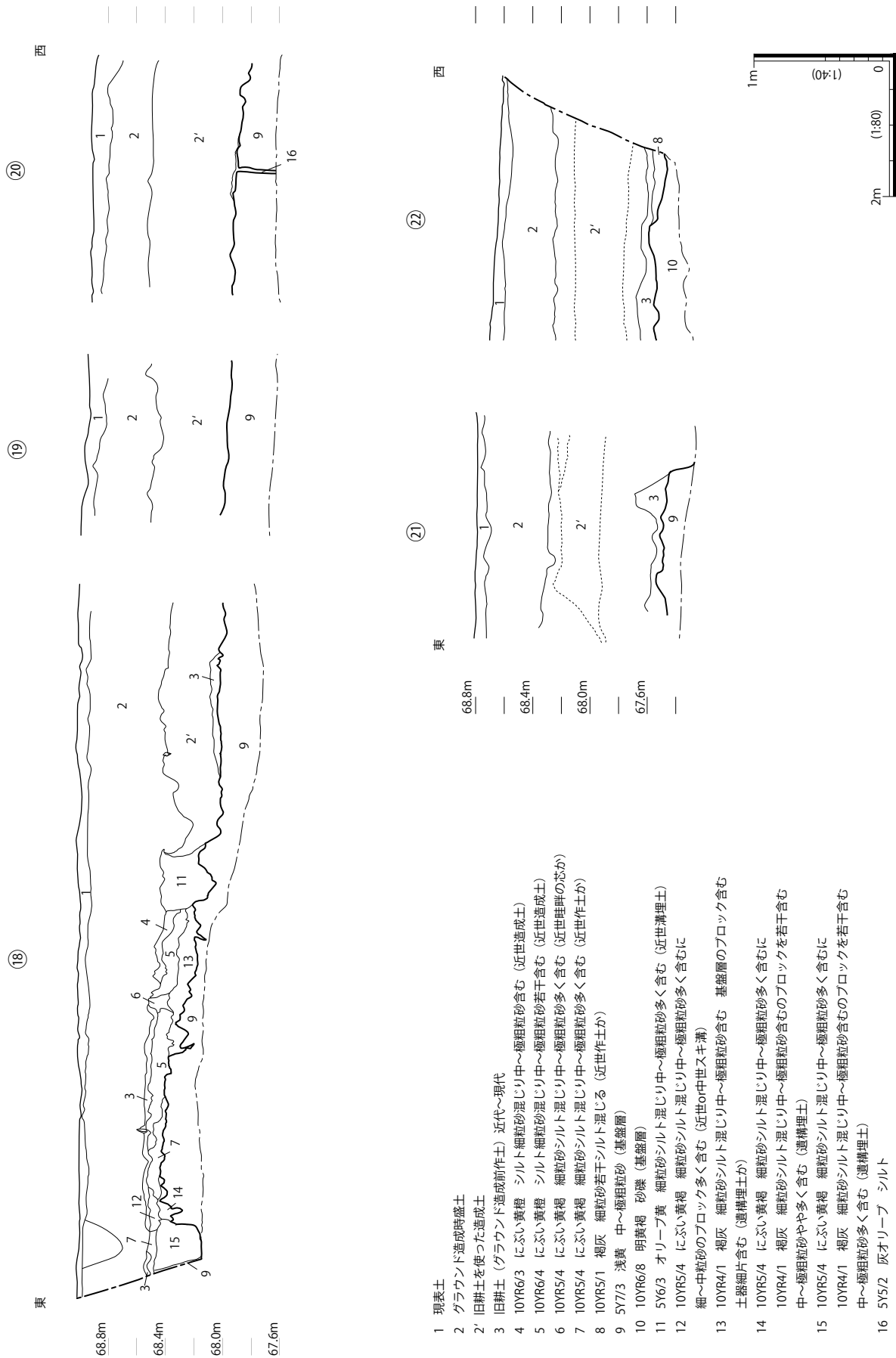


図 10 3区南壁 (18から22)

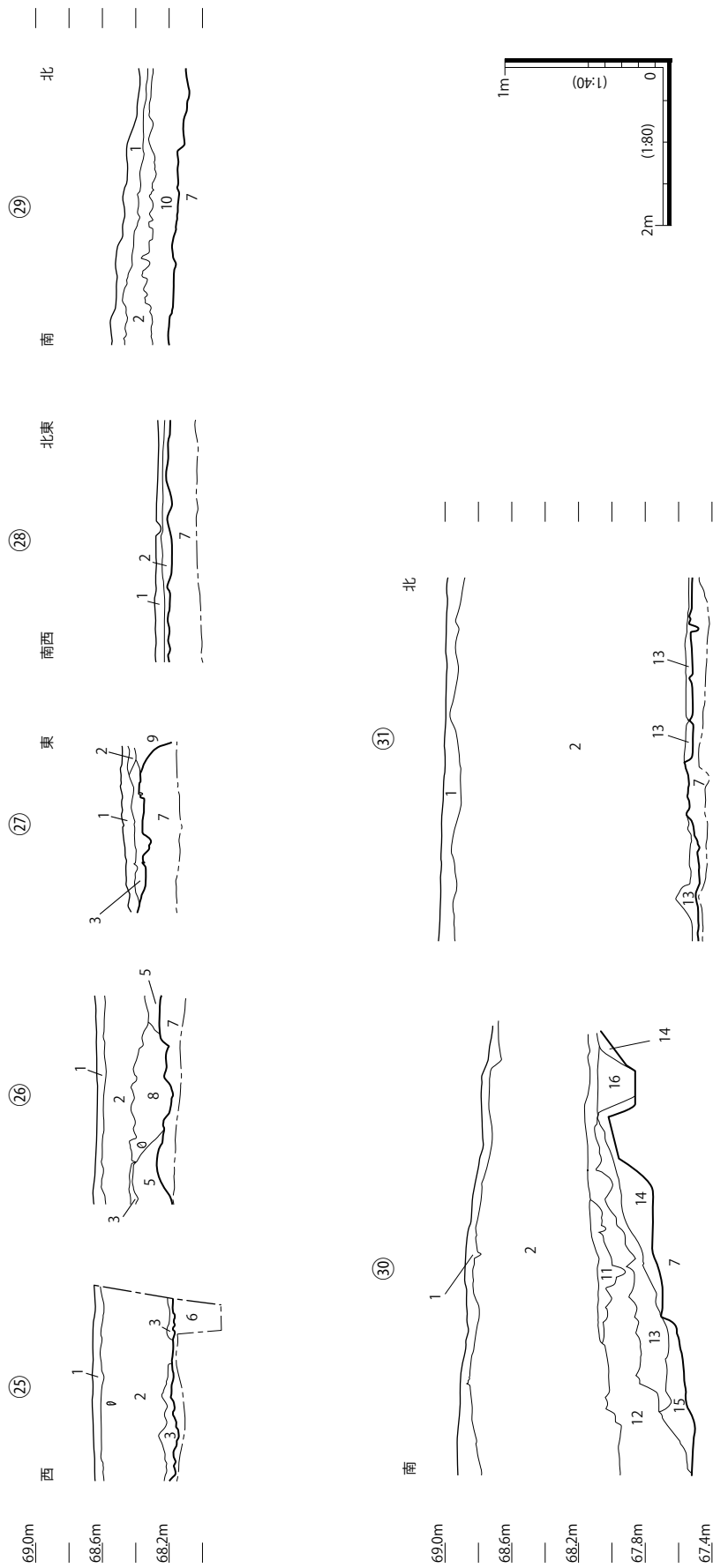


図 11 1 区西壁 (25から31)

- | | | |
|--|---|---|
| 1 現表土 | 7 10YR7/6 明黄褐 砂礫 (基盤層) | 13 N3/0 暗灰 細粒砂シルト混じり中〜極粗粒砂含む (旧耕土) |
| 2 グラウンド造成時盛土 | 8 10YR6/2 灰黄褐 細粒砂シルト混じり中〜極粗粒砂含む (遺構埋土) | 14 7.5Y6/2 灰オリーブ 細粒砂シルト混じり中〜極粗粒砂含む (中世作土) |
| 3 旧耕土 (グラウンド造成前作土) 近代〜現代 | 9 10YR6/2 灰黄褐 細粒砂シルト混じり中〜極粗粒砂含む (遺構埋土) | 15 5B7/1 明青灰 細〜中粒砂シルトブロック含む (旧耕土) |
| 4 (近世作土) 本断面では確認できず | 10 10YR7/1 灰白 砂礫 シルトブロック含む (グラウンド造成時の盛土) | 16 (遺構埋土) |
| 5 10YR6/3 にぶい黄橙 細粒砂シルト混じり中〜極粗粒砂多く含む (中世作土) | 11 10YR5/2 灰黄褐 細粒砂シルト混じり (グラウンド造成時盛土) | |
| 土器片炭化物含む 黄橙 シルト細粒砂や混じる 中〜極粗粒砂含む (基盤層) | 12 10G4/1 暗緑灰 細粒砂シルト混じり中〜極粗粒砂含む (グラウンド造成前の盛土 (旧耕土)) | |
| 6 10YR7/8 黄橙 シルト細粒砂や混じる 上部マンガン沈着あり | | |

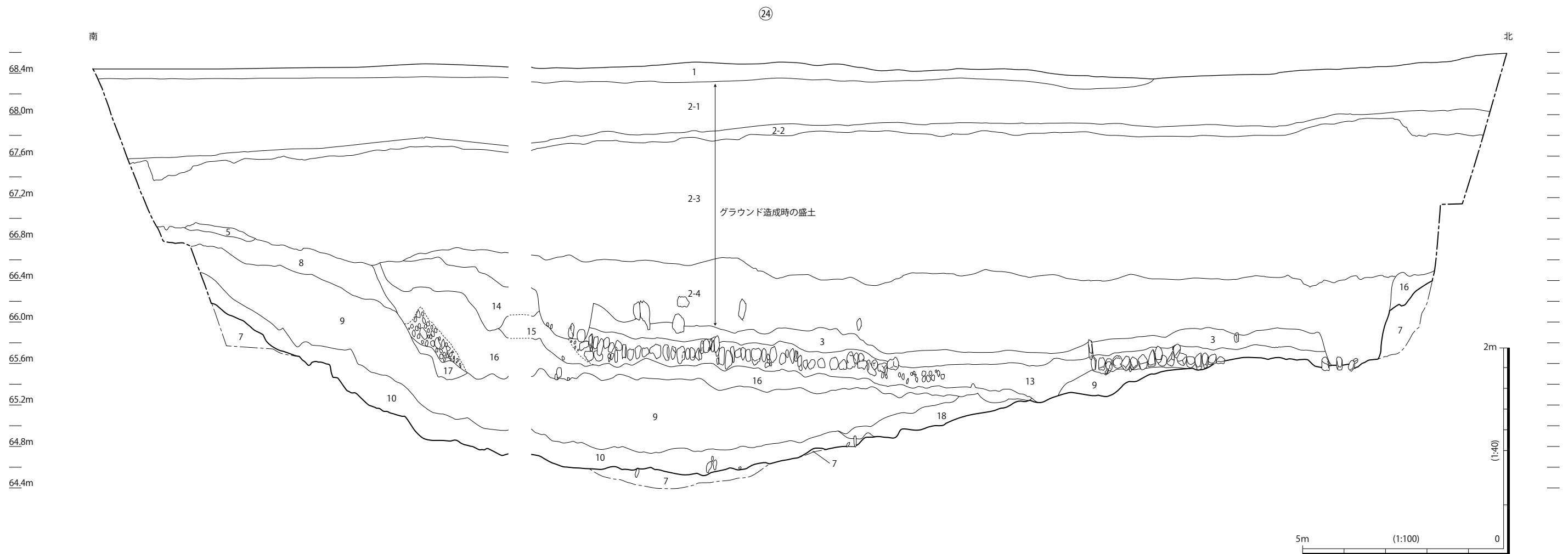
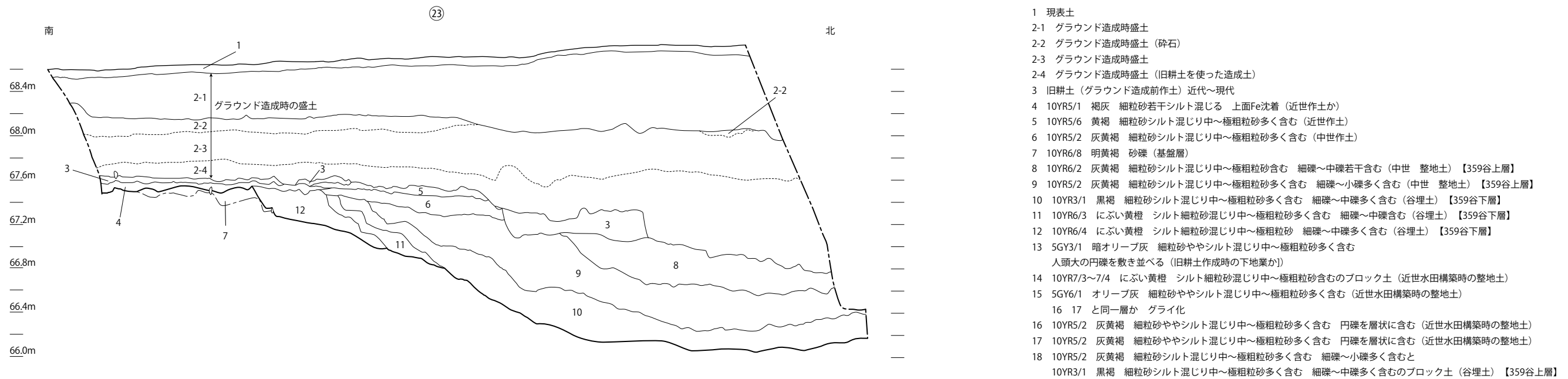


図 12 3区西壁 (23・24)

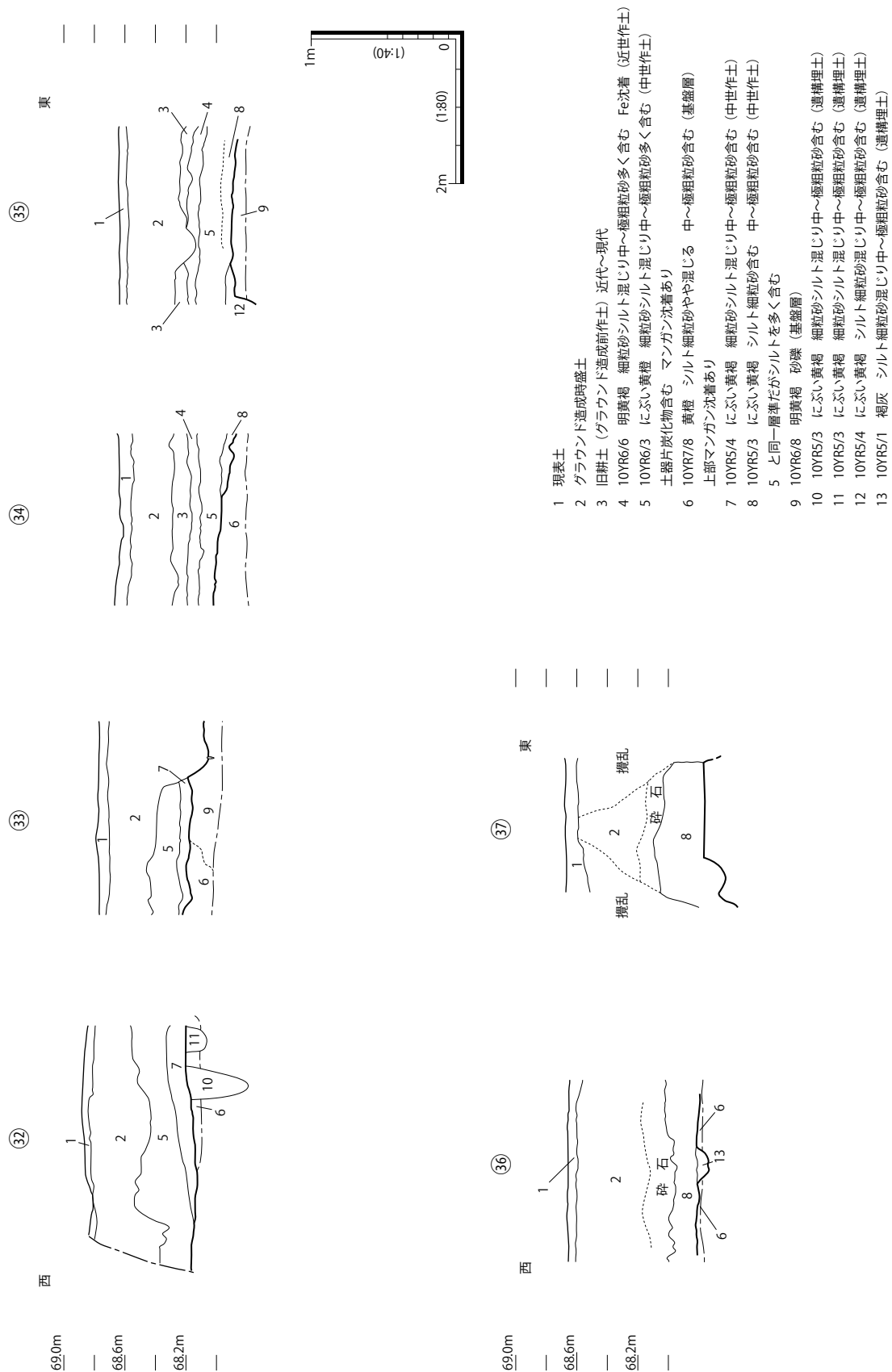


図 13 2 区北壁 (③②から③⑦)

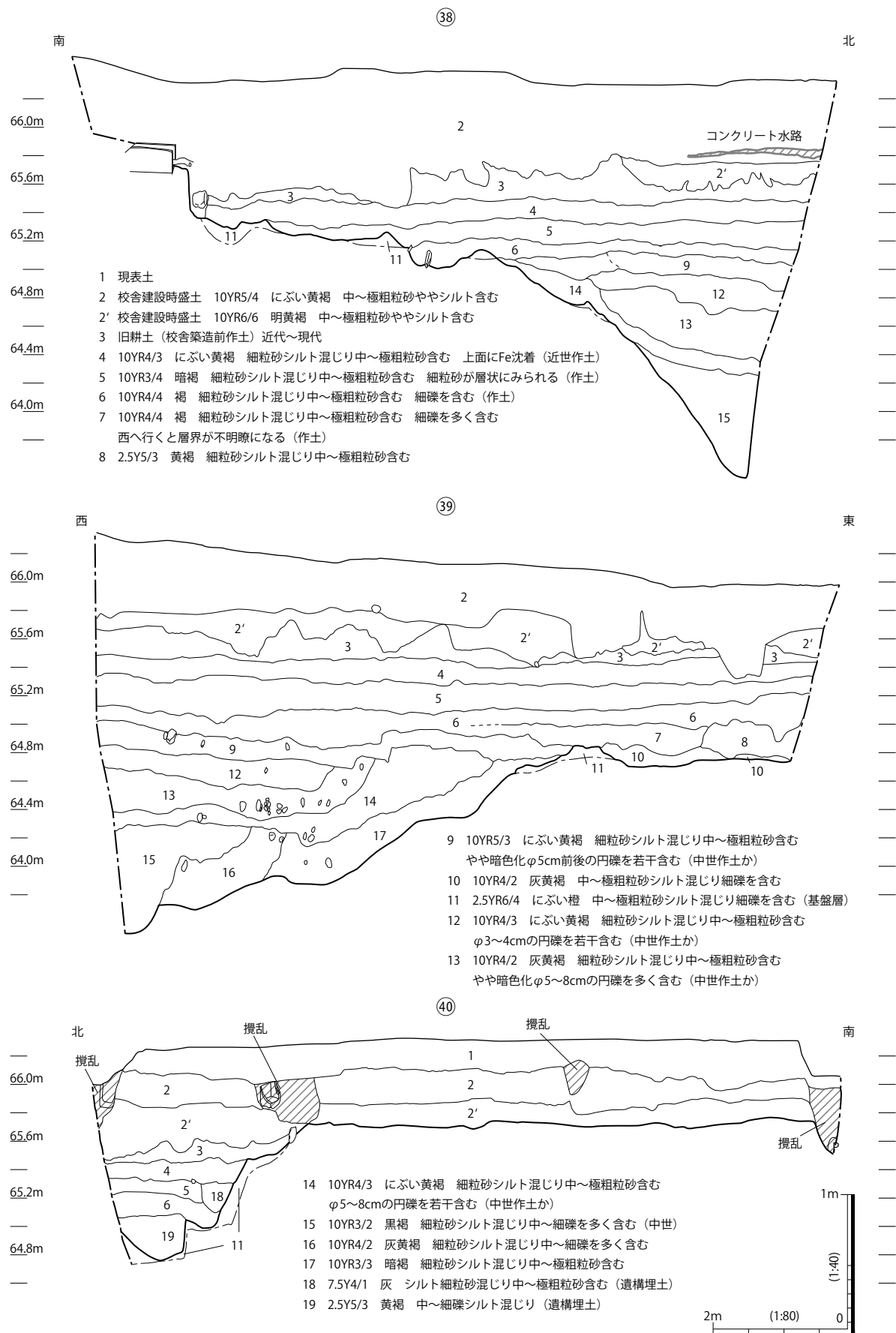


図 14 5区西・北・東壁 (38から40)

第4章 検出した遺構と遺物

今回の調査は、進入路や作業ヤード、掘削土置き場の関係で1から6の調査区に細分して行っているが遺構や遺物の記述はまとめて行う。記述において調査区名を記すが、大まかな場所を表すものと考えて頂きたい。

基本層序で述べたように、谷以外は中世の作土下が基盤層となっており、中世以前の土壌は確認できなかった。このため基盤層上面を遺構面としている。基盤層上面は場所によって、グラウンド整備時の造成や中世作土により削平を受けているが、調査地の地形を反映すると考えられる。ここでは、図15に0.5 m間隔の等高線図を示し地形を概観する。

調査地内の高さをみると、北西から南東方向に向けて68.0mの等高線が延びており、その東側が68.0～68.5 mを測る部分である。地形はここから南西の谷へ向かって下降する。67.0 mの等高線までは緩やかに下降するが、66.5 mの等高線からは急傾斜となり、谷の最深部では65.0～64.5 mを測る。検出した掘立柱建物の多くは、67.5 mの等高線より高い部分に位置しており、図15をみると調査区のほぼ3分の2がこれにあたる。その内、68.0～68.5 mを測る部分が大半を占め、広い平坦面を造り出していることが窺える。

以下、検出した遺構と遺物について記述する。

掘立柱建物

今回の調査では、掘立柱建物を26棟検出している。内、側柱建物は19棟、総柱建物は7棟である。なお、建物番号は調査時のものをそのまま使っているため、連番にはなっていない。

掘立柱建物1（図16、18 写真7-1～4）

1区北端で検出している、北で約25度西へ振れる北西-南東方向の側柱建物である。建物は調査区外へと延びるため全体の規模は不明だが、桁行3間以上梁行2間以上に考えられる。検出した桁行2間分の柱間は南から1.5 m、1.0 m。梁行1間分の柱間は1.5 mを測る。

柱穴には抜取りがみられ、平面形は不整形を呈する。抜取り埋土はおおむね褐灰色シルト細粒砂混じりで中から粗粒砂含み、明黄褐色シルト細粒砂混じりで中から粗粒砂を含むブロックを含む。掘方埋土は明黄褐色シルト細粒砂混じりで中から粗粒砂を含む。

柱穴からは須恵器や土師器の細片が出土しているが、図化できるものはなく時期の特定は難しいが、建物の向きが正方位から大きく振れていることから、中世以降の建物と考えられる。

掘立柱建物2（図16、19 写真7-5、8-1～4）

1区北半部で検出している。攪乱による削平を受けて、東西1間南北1間を検出したのみであるが、北で約4度東へ振れる2間2間の総柱建物に考えられる。東西1間分の柱間は2.2 m、南北1間分の柱間1.8 mを測る。

掘方の浅い18柱穴と、柱痕跡がみられる17柱穴以外の柱穴には、抜取りがみられる。このため、柱穴の平面は不整形を呈するが、本来は隅丸方形と考えられる。掘方の埋土はおおむね褐灰色シルト細粒砂混じりで中から粗粒砂を含み、基盤層である明黄褐色シルトやや細粒砂まじりで中から粗粒砂を含むブロックを含む。抜取り埋土は、掘方の埋土と同様であるが、基盤層のブロックを多く含む。



図 16 掘立柱建物・柱列 位置図 (1)

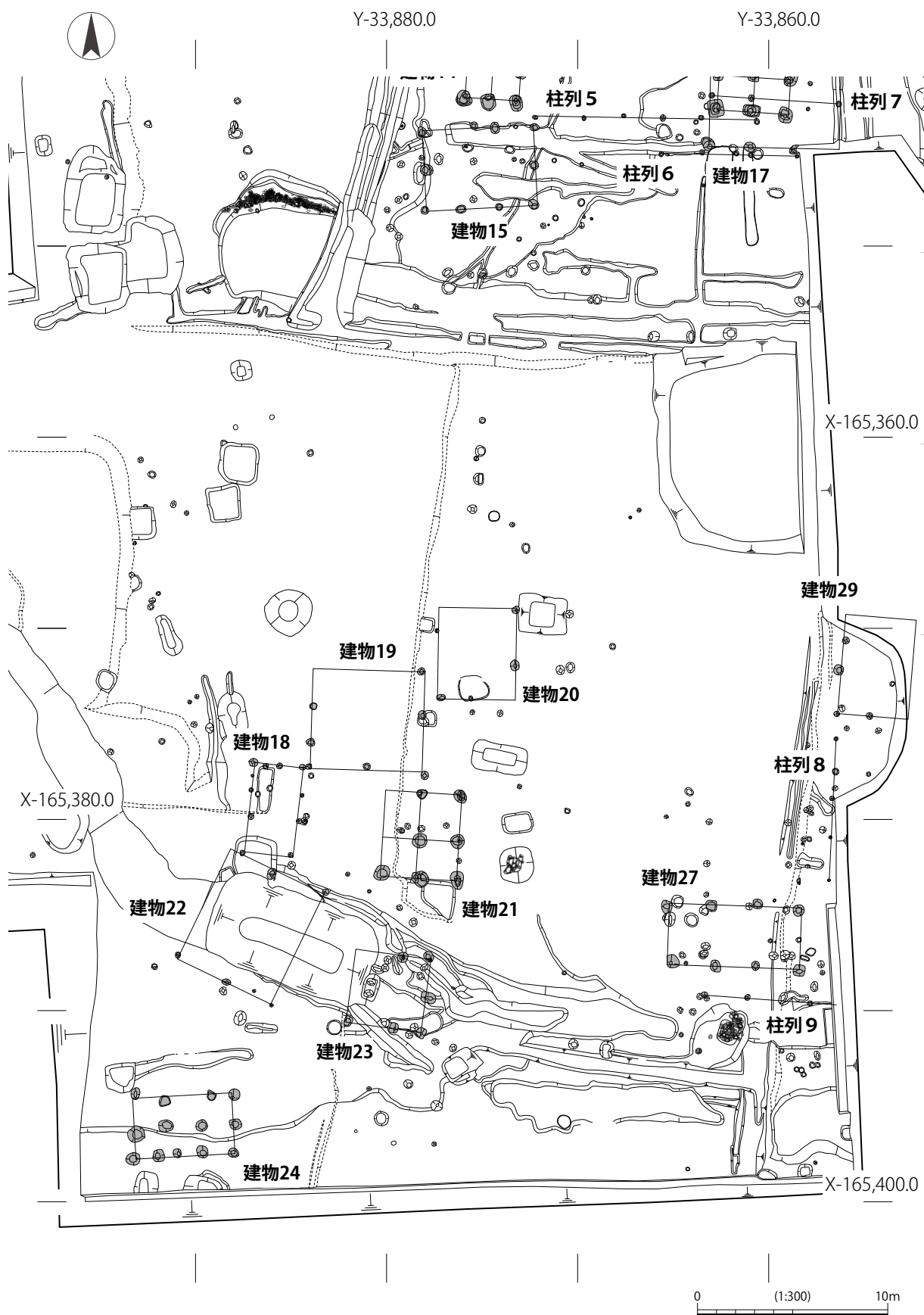
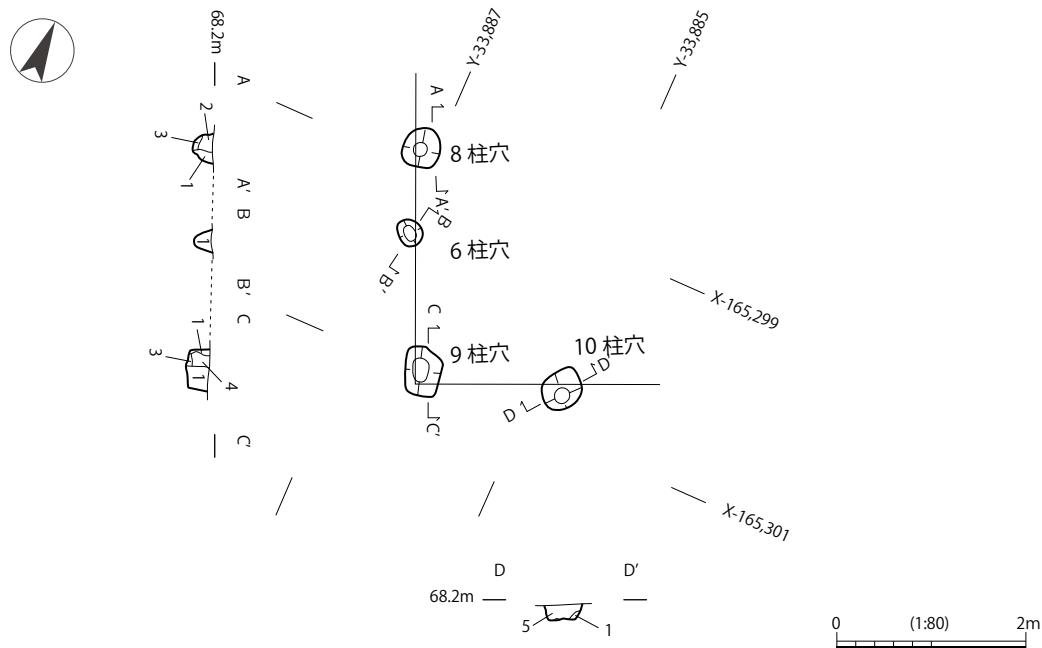
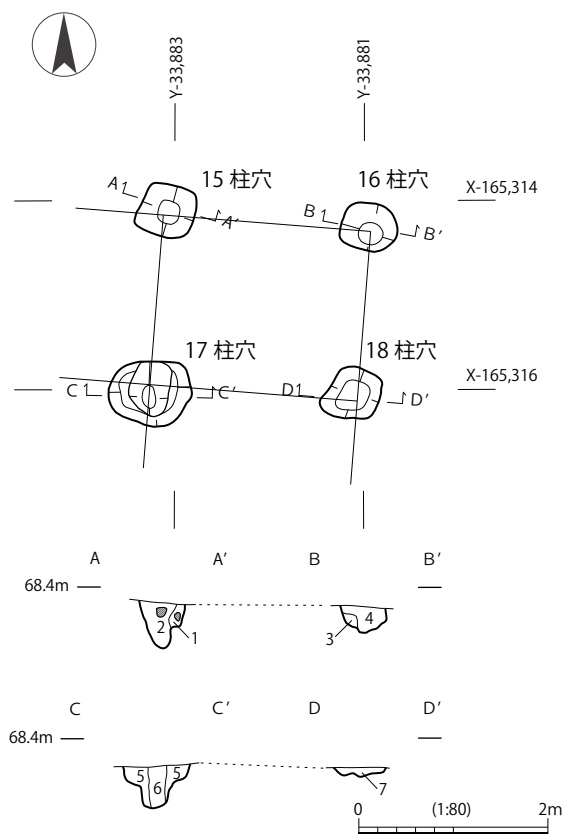


図 17 掘立柱建物・柱列 位置図 (2)



- 1 10YR6/6 明黄褐 シルト細粒砂混じり中～極粗粒砂含む（掘方）
- 2 10YR5/1 褐灰 シルト細粒砂混じり中～極粗粒砂含むに 10YR6/6 明黄褐 シルト細粒砂混じり中～極粗粒砂のブロック含む（掘取り）
- 3 10YR5/6 黄褐 シルト細粒砂混じり中～極粗粒砂含む（掘取り）
- 4 10YR5/1 褐灰 シルト細粒砂混じり中～極粗粒砂含むに 10YR6/6 明黄褐 シルト細粒砂混じり中～極粗粒砂のブロック含む炭化物、焼土塊多く含む（掘取り）
- 5 10YR6/6 明黄褐 シルト細粒砂混じり中～極粗粒砂に 10YR5/1 褐灰 シルト細粒砂混じり中～極粗粒砂のブロック若干含む（掘取り）

図 18 掘立柱建物 1



- 1 10YR5/1 褐灰 シルト細粒砂混じり中～粗粒砂含むと
10YR6/6 明黄褐 シルトやや細粒砂含む中～粗粒砂含む（基盤層）の
ブロック土で
10YR5/1 褐灰 シルト細粒砂混じり中～粗粒砂含むを多く含むが、
下半は 10YR5/1 褐灰 シルト細粒砂混じり中～粗粒砂含むが多い（掘方）
- 2 10YR5/1 褐灰 シルト細粒砂混じり中～粗粒砂含むと
10YR6/6 明黄褐 シルトやや細粒砂含む中～粗粒砂含む（基盤層）の
ブロックがほぼ均等に混じる（掘取り）
- 3 10YR5/1 褐灰 シルト細粒砂混じり中～粗粒砂含むが主で
10YR6/6 明黄褐 シルトやや細粒砂含む中～粗粒砂含む（基盤層）の
ブロックを含む（掘方）
- 4 10YR5/1 褐灰 シルト細粒砂混じり中～粗粒砂含むに
10YR6/6 明黄褐 シルトやや細粒砂含む中～粗粒砂含む（基盤層）の
ブロックを若干含む（掘取り）
- 5 10YR5/1 褐灰 シルト細粒砂混じり中～粗粒砂含むと
10YR6/6 明黄褐 シルトやや細粒砂含む中～粗粒砂含む（基盤層）の
ブロックがほぼ均等に混じる（掘方）
- 6 10YR5/1 褐灰 シルト細粒砂混じり中～粗粒砂含むに
10YR6/6 明黄褐 シルトやや細粒砂含む中～粗粒砂含む（基盤層）の
ブロックを僅かに含む
- 7 10YR5/1 褐灰 シルト細粒砂混じり中～粗粒砂含むに
10YR6/6 明黄褐 シルトやや細粒砂含む中～粗粒砂含む（基盤層）の
ブロックを含む（掘取りか？）

図 19 掘立柱建物 2